都城市文化財調査報告書 第48集

大久保第２遺跡

１９９９年３月

宮崎県都城市教育委員会

遺跡遠景（遠くに霧島を望む。遺跡は写真下部）

序

都城市教育委員会は昭和61年度から４ヶ年間で市内全域を対象に表面調査による遺跡の確認作業、所謂遺跡詳細分布調査を行ない昭和63年度市内北東部の悉皆調査によって大久保第２遺跡が周知され今日に至っています。

本書は同教育委員会が平成９年身体障害者療護施設建設にともない実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書です。調査によって弥生時代後期の竪穴住居跡や周溝状遺構等の貴重な資料が出土しています。

本書が市民をはじめ多くの方々の文化財に対する理解を深め、さらに学術研究に活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、福祉施設建設事業主岩川醸造株式会社

氏には発掘調査から報告書作成に至るまで文化財保護をご理解頂き感謝申し上げます。また、調査に際し関係した各機関や地元の皆様をはじめ発掘調査に従事した作業員の方々に対し心から感謝を申し上げます。

平成11年３月

都城市教育長　隈 元 幸 美

例　　言

1．本書は都城市乙房町2191番地3外7筆内における身体障害者療護施設建設事業に伴い、都城市教育委員会が平成９年度に発掘調査の委託を受け実施した大久保第２遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書に掲載した遺構実測図は矢部喜多夫及び現場作業員が作成し、そのほか都城市教育委員会文化課職員乗畑光博、横山哲英、米澤英昭、文化課嘱託下田代清海の協力を得た。

3．本書に用いた方位はすべて磁北である。

4．本書に掲載した遺物実測図は、矢部喜多夫、雁野あつ子、池谷香代子、水光弘子、奥登根子が作成し、矢部喜多夫が浄書した。

5．遺構・遺物の写真は、矢部喜多夫が撮影した。

6．陶磁器に関しては、佐賀県有田町歴史民俗資料館 学芸員村上伸之氏にご指導を賜った。

7．本調査により出土した遺物は都城市文化財整理収蔵室において保管される予定である。

8．本書の執筆・編集は矢部があたった。

9．本書で用い略記号は次のとおりである。

OHKBⅡ-大久保第２遺跡

SA -竪穴住居跡, ST -周溝状遺構, SC -土坑, SD -溝状遺構, SP -柱穴,

本文目次

Ⅰ　はじめに……1
　1．調査に至る経緯……1
　2．調査の組織と構成……1
Ⅱ　遺跡の位置と環境……2
Ⅲ　調査報告……4
　1．調査概要……4
　2．遺構と遺物……5
　　①縄文時代……6
　　②弥生時代……6
　　③中近世以降……22
　3．自然科学分析……31
　4．小結……41

挿図目次

第1図　大久保第2遺跡試掘トレンチ位置図……2
第2図　周辺遺跡位置図……3
第3図　遺跡位置図……4
第4図　大久保第2遺跡発掘調査区域図……5
第5図　縄文土器実測図……5
第6図　遺構配置図……7～8
第7図　掲載遺物分布図……6
第8図　弥生土器実測図……6
第9図　大久保第2遺跡土層断面図……9～10
第10図　周溝状遺構（ST01）・1号竪穴住居跡（SA01）遺構実測図……11～12
第11図　周溝状遺構（ST01）内出土遺物実測図……13
第12図　1号竪穴住居跡（SA01）内出土遺物実測図……14
第13図　2号竪穴住居跡（SA02）遺構実測図……15
第14図　2号竪穴住居跡（SA02）内出土遺物実測図……16
第15図　3号竪穴住居跡（SA03）遺構実測図……17
第16図　3号竪穴住居跡（SA03）内出土遺物実測図……18
第17図　3号竪穴住居跡（SA03）内出土遺物実測図－2……19
第18図　4号竪穴住居跡（SA04）遺構実測図……20
第19図　4号竪穴住居跡（SA04）内出土遺物実測図……21
第20図　1号土坑（SC01）遺構実測図……22
第21図　1号土坑（SC01）内出土遺物実測図……22
第22図　包含層内出土遺物実測図－1……23
第23図　包含層内出土遺物実測図－2……24
第24図　包含層内出土遺物実測図－3……25
第25図　包含層内出土遺物実測図－4……26
第26図　特殊土坑実測図……27
第27図　溝状遺構内出土遺物実測図……27
第28図　ピット内出土遺物実測図……27
第29図　近世以降遺物実測図……28

写真図版

第1図版　発掘調査区域全景……45
第2図版　4号溝状遺構内遺物出土状況・特殊土坑半截状況・同完掘状況……46
第3図版　畝状遺構検出状況・1号溝状遺構土層断面……47
第4図版　高坏脚部出土状況・1号土坑検出状況・同タチワリ状況……48
第5図版　周溝状遺構及び1号竪穴住居跡精査・同完掘状況・2号竪穴住居跡遺物出土状況……49
第6図版　2号竪穴住居跡完掘状況・4号竪穴住居跡遺物出土状況・4号竪穴住居跡完掘状況……50
第7図版　3号竪穴住居跡遺物出土状況・3号竪穴住居跡完掘状況……51
第8図版　掲載遺物写真－1……52
第9図版　掲載遺物写真－2……53
第10図版　掲載遺物写真－3……54
第11図版　掲載遺物写真－4……55
第12図版　掲載遺物写真－5……56

Ⅰ はじめに

1．調査に至る経緯

平成９年１月17日付、岩川醸造株式会社代表取締役　　（鹿児島県曽於郡大隅町岩川6,557番地6）より都城市教育委員会文化課に都城市乙房町2191番3外7筆にかかる文化財の所在の有無についての照会がなされた。照会地は都城市遺跡詳細分布図の大久保第２遺跡（8004）内に含まれているため、同課では試掘確認調査が必要であると回答し、具体的な日程の協議をはじめた。

試掘調査は平成９年４月22日から同月30日において第１次を実施した。試掘内容は25のトレンチを設定し、その内４トレンチでアカホヤ火山灰層下まで掘下げ縄文早期の遺跡の確認をおこなった。結果、19トレンチから地表面下40cm前後で弥生時代後期及び近世以降の遺物が出土し、11トレンチからは該期の遺構も検出した。また、アカホヤ層下の４トレンチのうち北側２トレンチで早期該当の礫群が出土した。さらに、平成９年６月３日付、取付け道路部分予定地4,300㎡の照会があり、平成９年６月16日から23日かけて第２次の試掘調査を行ない、都合トレンチを６ヶ所設けた。試掘結果は、谷状の地形で御池ボラ層上部が削平を受けており、近世以降の遺構・遺物が若干出土した。

試掘調査の結果をもとに、対象地約14,000㎡のうち遺跡の破壊を避けることができない建物建設部分約4,000㎡に対し発掘調査を行ない記録保存を実施することで協議を詰めた。最終的に協定書は、工事実施を平成10年４月から行なうのため、平成９年10月から翌年３月までの期間において発掘調査を終了することで同意を得た。平成10年10月６日現場確認を再度おこなったが、耕作の中断により雑草や竹等が生茂っており調査に着手できる状態でなかったので、委託者に刈取り撤去をお願いし、10月14日より重機による表土剥ぎを始め、翌日から作業員を導入し調査を開始した。

2．調査の組織と構成

調査委託	岩川醸造株式会社		
調査受託	都城市長		岩橋　辰也
調査主体	都城市教育委員会	教育長	隈元　幸美
調査総括	〃　　文化課	課長	遠矢　昭夫
	〃	課長補佐	綿田　秋嗣
	〃	文化財係長	中村　久司
調査庶務	〃	文化財係主査	矢部喜多夫
	〃	臨時職員	原口　尚美
調査担当	〃	文化財係主査	矢部喜多夫

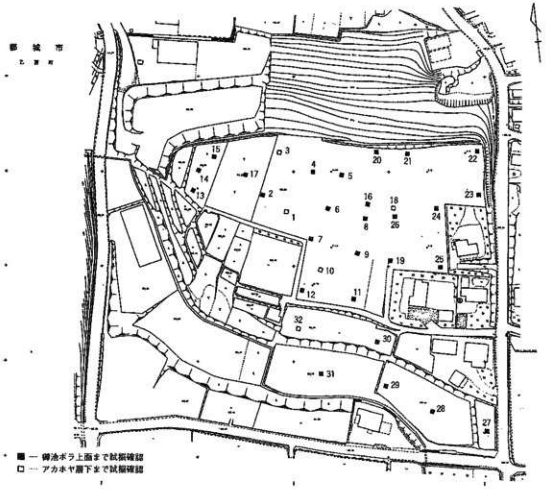
調査作業　和田利雄　鴇松雄　鴇芳明　荒ヶ田安夫　東泰雄　東前利雄　曽原主吉
竹之内篤義　荒ヶ田エダ　有水トミ　松原ヨシ子　立野良子　木牟礼篤子
馬籠恵子　堀川カズ子　大山伊智子　永田美千代　庄屋幸子　高井田マサ子
藤田和子　今村ツチエ　抜迫清美　稲丸雅文（鹿児島大学学生）
外山隆之（鹿児島大学学生）

整理作業　雁野あつ子　池谷香代子　水光弘子　奥登根子

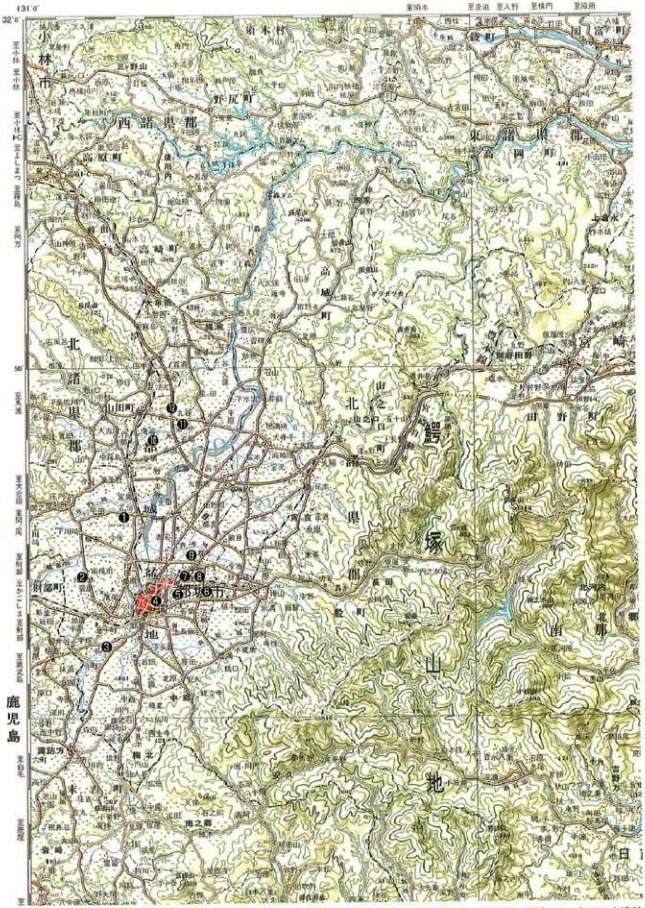
Ⅱ　遺跡の位置と環境

大久保第２遺跡は都城市の北部、旧庄内村乙房町字大久保に所在する。都城市は霧島火山群と鰐塚山地にはさまれた盆地のほぼ中央に位置し、盆地を南北に切裂くように大淀川が走行し、その支流の小河川が西から東へ、また東から西へ葉脈状に本流へと流れ込む。これら小河川の両岸には河岸段丘が発達し、その眼下には開折された扇状地が低地水田面を形成している。当遺跡は大淀川の一支流庄内川により分断された南側台地縁辺に位置し、標高約160mほどで北側水田面との比高差は約15mである。

周辺遺跡に目を転じてみると、対岸の菓子野町に県指定の庄内（円墳）古墳（8067）と菓子野地下式横穴墓群（8066）が点在し、後者は昭和57年５基、昭和59年３基発掘調査を実施している。また、西隣の庄内町には応仁二年（1468年）都城島津家第６代北郷敏久の築城とされる安永城がシラス台地を利用した数曲輪から構築されている。また、平成６年には月野原第２遺跡（6040）で調査がおこなわれており、縄文後期・弥生中期・中世期の遺構・遺物が出土し、特に弥生中期では竪穴状遺構が出土している。昭和63年度遺跡詳細分布調査によると大久保第２遺跡の立地する台地には縁辺部を中心にかなりの遺跡が確認されている。



第１図　大久保第２遺跡試掘トレンチ位置図



1. 大久保第２遺跡　2. 加治屋第１遺跡　3. 岩立遺跡　4. 柳川原遺跡　5. 年見川遺跡　6. 向原第１遺跡　7. 牟田ノ上遺跡
8. 池ノ友遺跡　9. 祝吉(第１・第２)遺跡　10. 中大五郎遺跡　11. 前畑遺跡　12. 丸谷第１遺跡

第２図　周辺遺跡位置図（1/200,000）

Ⅲ　調査報告

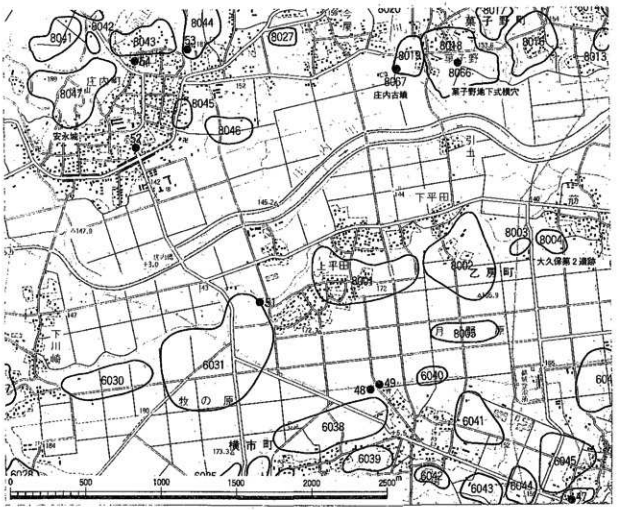
1．調査概要

大久保第２遺跡は昭和63年度遺跡詳細分布調査（市内北東部）により、埋蔵文化財包蔵地として周知され、都城盆地の北西庄内川南岸のほぼ平坦な成層シラス台地上に立地する。調査地点は同台地の北側縁辺に位置し、標高約160mほどである。

調査は先ず重機により表土層約20～30cmを剥ぎ取り、検出層は近世以降では第３層黒褐色土層、弥生以前は第４層黒褐色御池ボラ混土層（漸移層）まで手掘りにより掘下げた。結果、近世以降の溝状遺構６条・柱穴、中世の土坑１基、畝状遺構・ピット、弥生後期の竪穴住居跡４基・周溝状遺構１基およびそれぞれの時期に伴う土器・石器・陶磁器類と縄文土器等を発見した。

遺跡の基本層序は第１層灰黒色土（耕作土）、第２層白ボラブロック層（文明期：桜島より噴火した火山軽石）、第３層黒褐色土層（遺物包含層）、第４層黒褐色御池ボラ混土層（漸移層）、第５層御池ボラ層と続く。なお、建物建設予定地内は試掘調査でアカホヤ層下の遺跡を確認できなかったため、調査は実施していない。調査区域の地形は調査前は東西北南方向ともほぼフラットであるが、第４層上面、言い換えれば検出面では南北方向では北側に向かって緩やかに傾斜し、B－５区を中心に北から谷状の落込みが延びている。

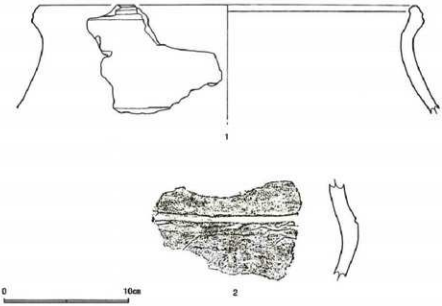
調査方法は公共座標系（ＳＮ線）に一致したグリッドを設定し、南北方向を北からアルファベットで、東西方向を東から算用数字で各グリッドを便宜上呼称する。



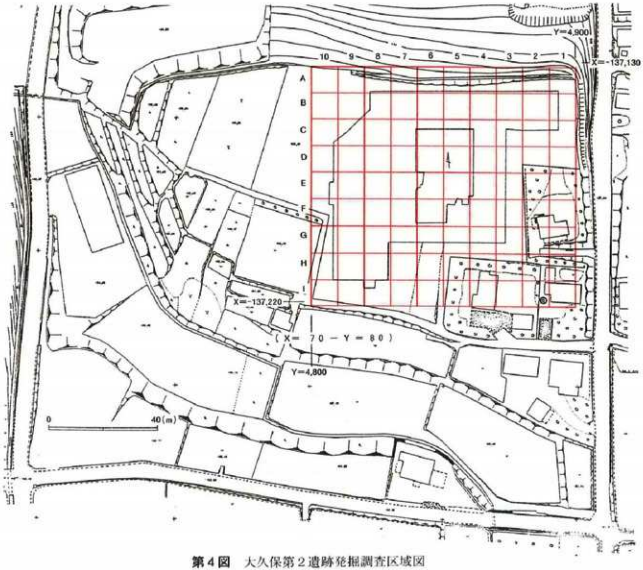
第３図　遺跡位置図

2．遺構と遺物

約4，000㎡の調査区域において、南東部はトレンチャアーによる破壊が及んでいる。また、調査区西側では第1層と第3層の間に白ボラが縞状に堆積している。そのほかは第1層、第3層、第4層と明瞭に確認できる。遺物は2,000点以上取り上げたが、実測可能なものは少数でほぼ掲載した遺物数ほどである。以下古い遺構遺物から順次説明する。



第5図　縄文土器実測図



第4図　大久保第2遺跡発掘調査区域図

① 縄文時代

G-9、H-9区より出土。取上げ数では十数点ほどあるが、個体数では胎土、調整等から２個体あるようだ。01は深鉢形土器の口縁から胴部片、02は胴部片である。口縁肥厚部に２条、胴部最大径直上に１条の浅い凹線を施す。

② 弥生時代

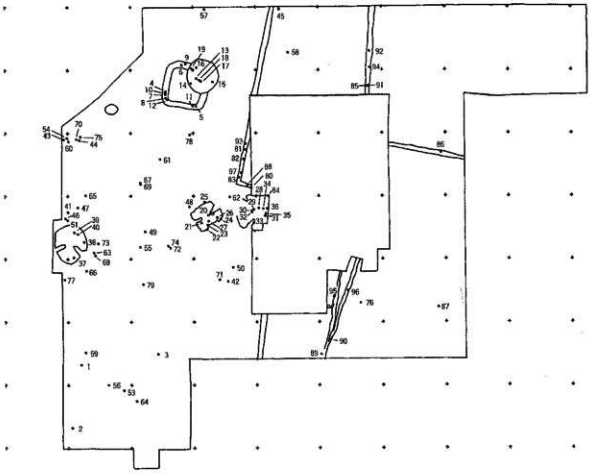
G-8,9区より出土。03は甕の口縁部で、同端部に一条の貼付け突帯に刻目施す。突帯下は縦方向のハケメ、胎土に金雲母を含む。

3

0　10cm

第８図　弥生土器実測図

周溝状遺構（ＳＴ01）　B-7,8及びC-7,8区で１号竪穴住居跡（ＳＡ01）と切り合うかたちで検出した。前後関係はST01が古い。遺構は第４層上面で確認し、平面形態は方形で一部北西部は隅丸で、断面は台形状を呈する。一辺は約７m、溝幅0.９～1.0m、検出面より深さ0.３m前後を測る。周溝内郭部に遺構は確認されなかった。04～06は甕形土器片で、04は底部（欠損）から緩やかに立上がり頸部でくの字に折れやや外反する。胴部最大径と口径がほぼ等しく推定31cmを測る。07は器台と思われる。外面に沈線と重弧文を施す。08は壺の胴部、09は鉢形土器で口縁部でやや内湾する。10は甕の中空脚台、11は壺形の底部と思われレンズ状をなしている。



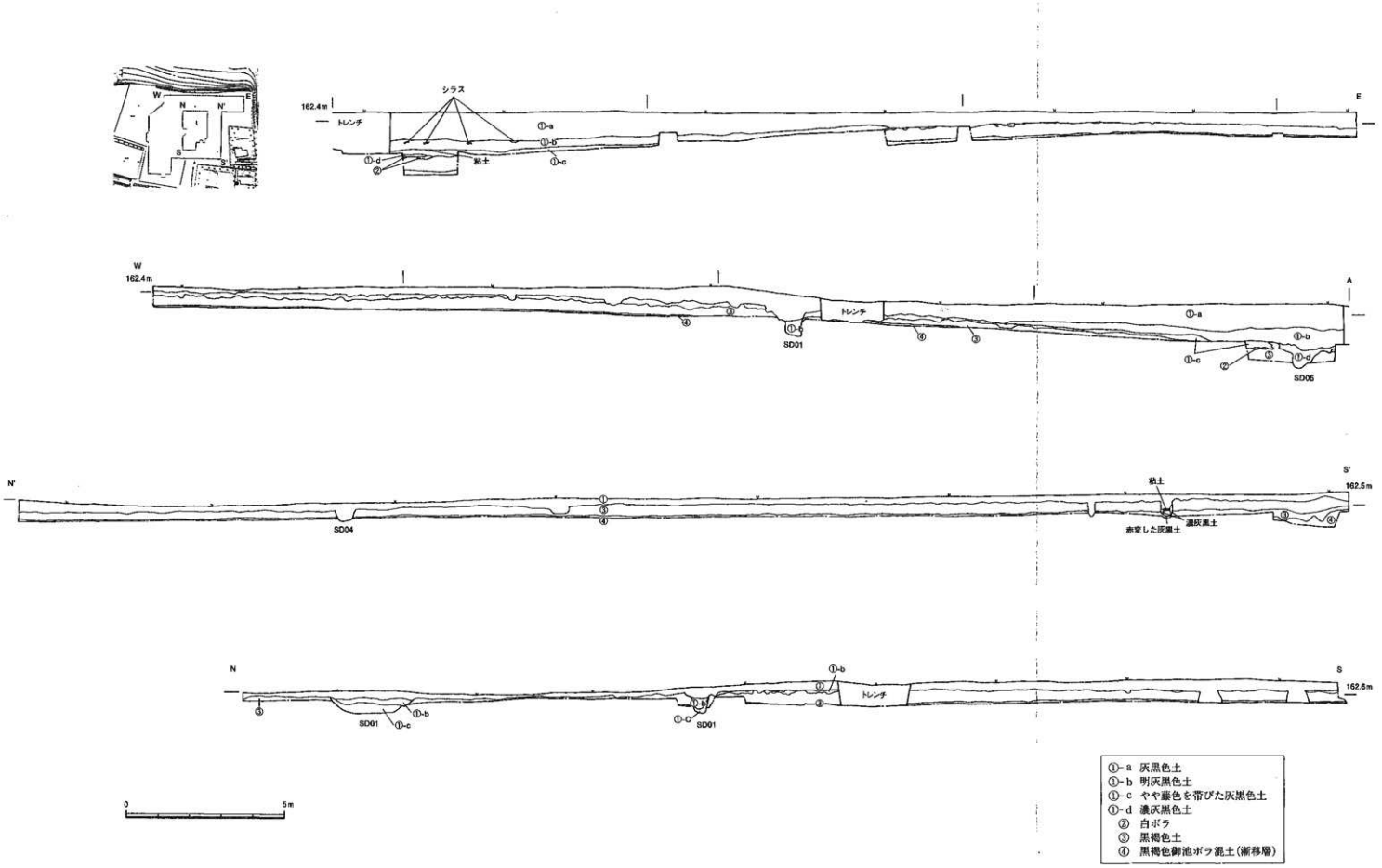
第７図　掲載遺物分布図

0　10(m)

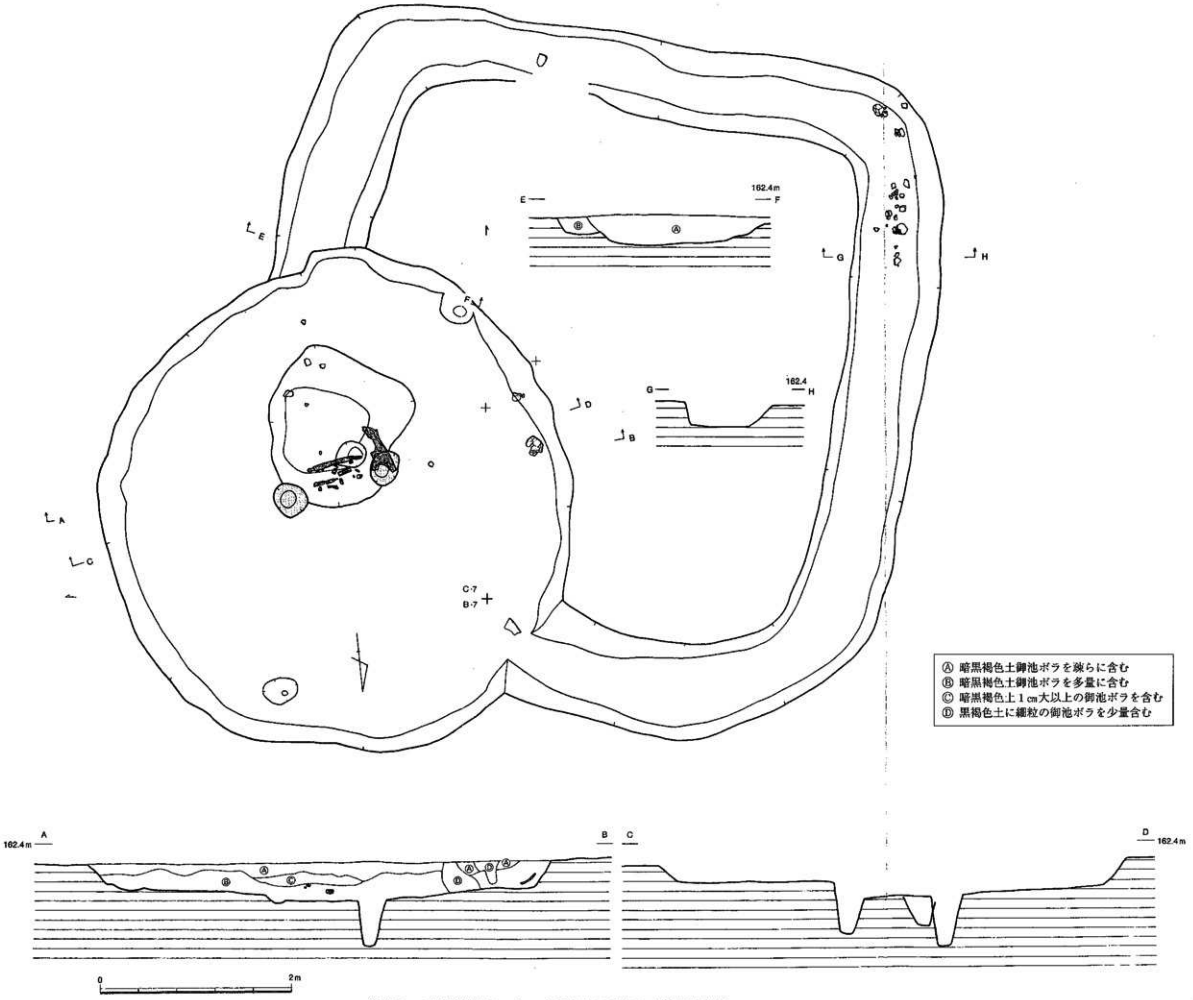
(X＝　70－Y＝　80)

SD01
161.0m
SD05
SA01
ST01
SA02
SA03
SA04
SD04
162.0m
162.0m
SD03
SD02
SD06
162.4m
163.08
160.91
157.34
152.16

第6図　遺構配置図



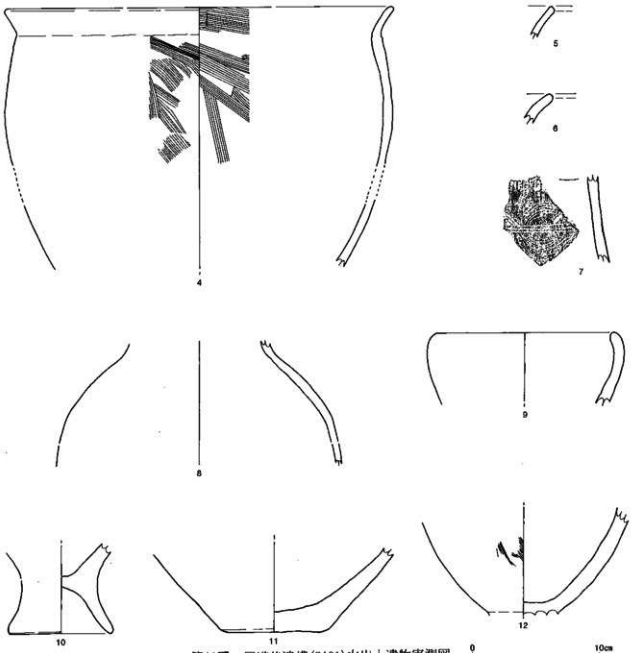
第9図　大久保第2遺跡土層断面図



第10図　周溝状遺構(ST01)・1号竪穴住居跡(SA01)遺構実測図

１号竪穴住居跡（ＳＡ01）　ほぼ円形で南北方向約5.2m、東西方向5.0mを測る。南側周溝状遺構との切合い部分に突出部分がみられる。遺構中央に２本の主柱穴が１m間で位置し、その南側に浅い土坑状の落込みがある。また、中央付近床面５cmほど上で棟木や垂木の一部と思われる炭化材が出土している。13～15は甕形上器で13は口縁部がくの字に折れる。14は胴部から緩やかに外反しカキアゲの段をもつ。15は甕の口縁部片で口縁は緩やかに外反し、屈曲部に若干カキアゲの段が残る。16・18壷形土器の底部で平底である。17は手捏ねのミニチュア土器である。19は偏平の石器で両面に擦痕がみられ、用途については不明である。

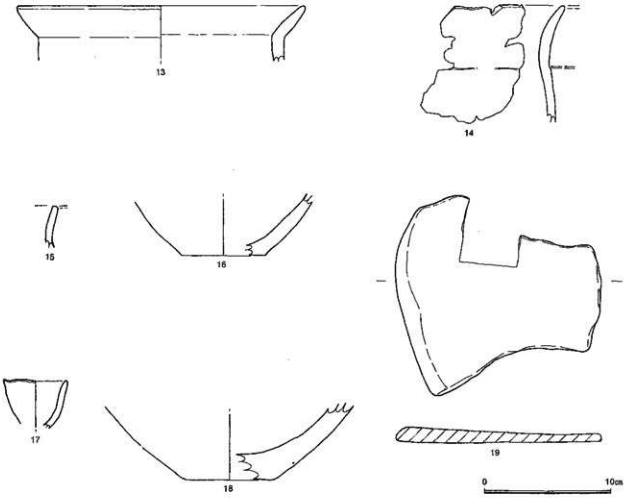
２号竪穴住居跡（ＳＡ02）　E-7区第３層最下部で検出した。検出時は北東～南東方向が長軸の隅丸方形状のプランとして確認したが、最終的な完掘状況では突出壁をもついわゆるH型の方形プランとなった。長辺最大4．4m、短辺最大3．6mを測る。主柱穴は1．8m間の２本柱タイプで、柱穴の位置は間仕切り壁とほぼ並行である。南側コーナーに壁帯溝が一部残存する。埋土は基本的には第３層黒褐色土であるがやや暗



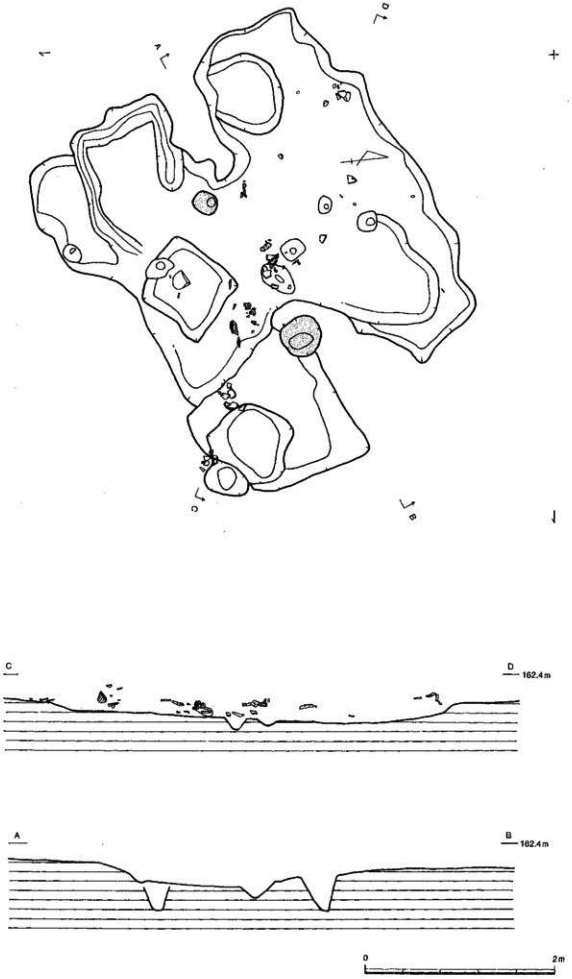
第11図　周溝状遺構(SA01)内出土遺物実測図

めで御池ボラが少量含まれるが、床面近くではボラの含有量が増す。 20～23は甕形土器で20は胴下部からやや膨らみを帯びて緩慢に立上がり、丸みをもたせた頸部（屈曲部）にカキアゲによる段を有し、口縁は長めで外反気味に延びる。外器面にススの付着がみられ、胎土に砂粒を多量に含む。21～23はくの字口縁で屈曲部に調整工具により横方向にカキアゲ様の綾をもつ。胎土に砂粒を含み外器面にススの付着がみられる。24は小型の壺形土器で口縁部はくの字状に折れると思われる。胴上半は縦方向のハケメを施す。胎土に砂粒を含むが器壁は薄い。25は鉢形土器と思われる。ススの付着なし。26は壺で胎土に砂粒を含み、口縁端から内器面3cm、外器面2cmほどまでススの付着がある。27は台石で両面に擦痕がみられる。

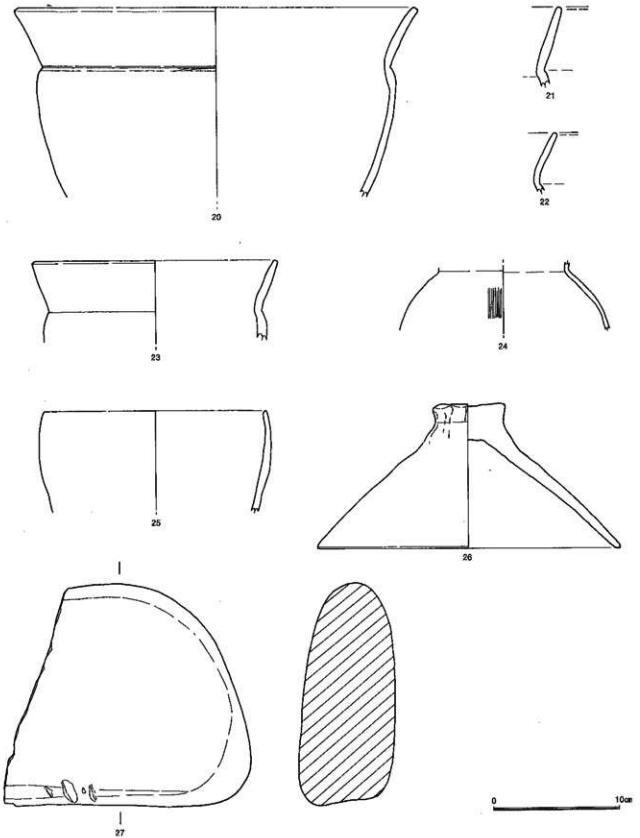
3号竪穴住居跡（ＳＡ03）　E-7、F-7区第３層下部で遺物の出土を確認。調査区外に入り込むため遺構の全容は把握できなかったが、推定径７m前後の花弁形住居跡で調査区内において２ヶ所に突出壁をもつ。主柱穴の配列は不明な点が多いが検出できた柱穴から円形に配置されると思われる。検出面でのプラン確認ができず、完掘間際でようやく平面プランを視認しため床面でのプランのみである。略南北方向に棟木、それと直行するかたちで垂木が部分的であるが炭化した状態で出土し、土器等も同一レベルでの出土である。28・29は甕形土器である。28は底部（脚台）が外反しながら開き、胴部にかけて緩やかに立上がり、口縁部は僅かに外反し屈曲部は綾をもたない。29は欠損しているがあげ底（脚台）状の底部から胴部にかけてなだらかに立上がり、口縁部はくの字に折れ外反気味にやや丸みがかった口縁端部となる。屈曲部の綾は鈍い。口縁内面は横方向にハケメ、胴部は縦方向にハケメを施し屈曲部下のみ部分的にナデている。同上半にススの付着がみられる。30は壺形土器で胴部最大径が中央で口縁部は緩やかに外反する。31は壺形土器の底部で平底である。32は鉢で底部と口縁は楕円形をなしプロポーションは歪である。胎土に砂粒



第12図　１号竪穴住居跡(SA01)内出土遺物実測図

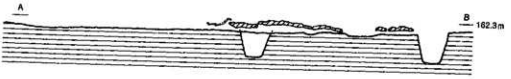


第13図　2号竪穴住居跡(SA02)遺構実測図



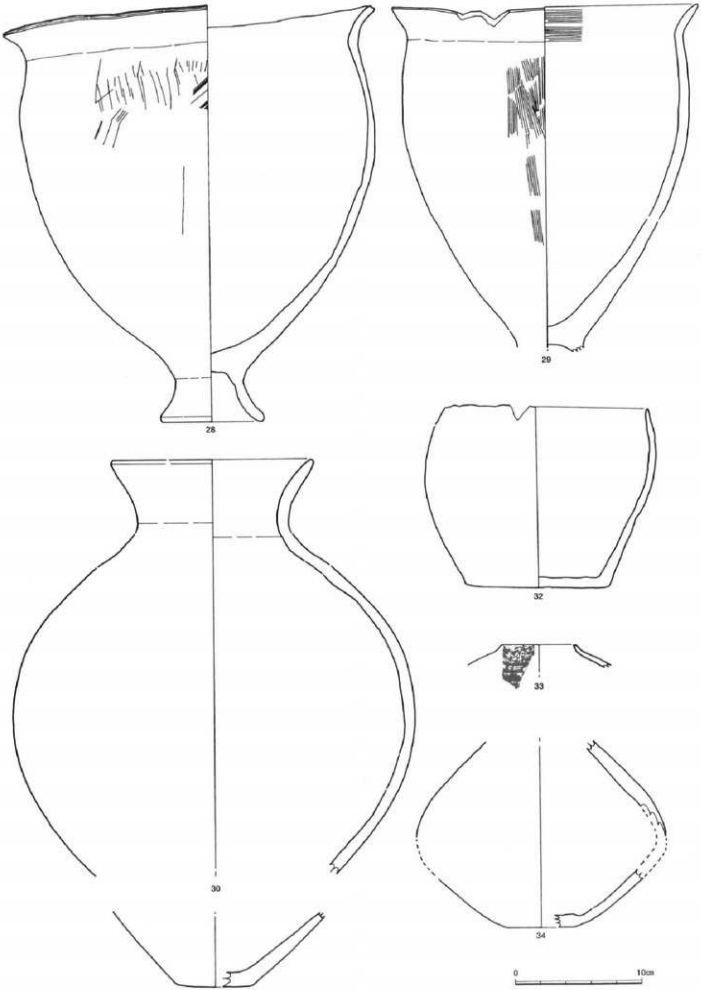
第14図　2号竪穴住居跡(SA02)内出土遺物実測図

を含み器壁は薄く脆弱である。33は無頸壺（小型）と思われるが小片のため定かではない。張った胴部から口縁部へ締まり、口唇部はフラットで口縁に櫛描きの波状文下部に浅く羽状文を刻む。器壁は薄く焼成良く堅緻で外面にススの付着がある。34は長頸壺の胴部と思われるが疑問も残る。外面はミガキ、胎土に砂粒を含むが堅緻である。35は台石。36は頁岩製の石包丁。

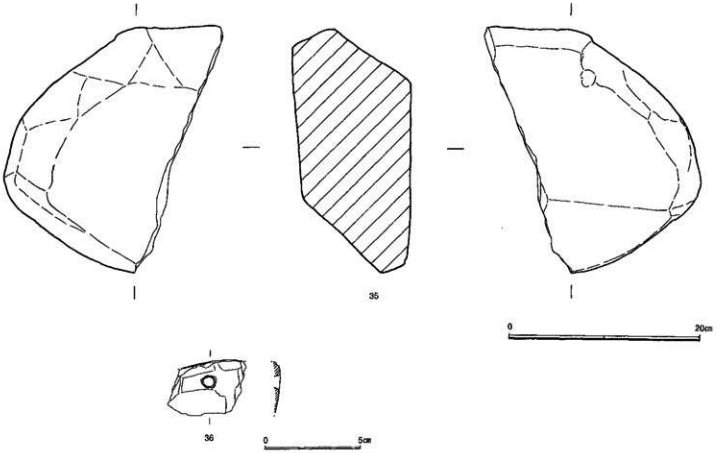


第15図　3号竪穴住居跡(SA03)遺構実測図

0　2m



第16図　3号竪穴住居跡(SA03)内出土遺物実測図

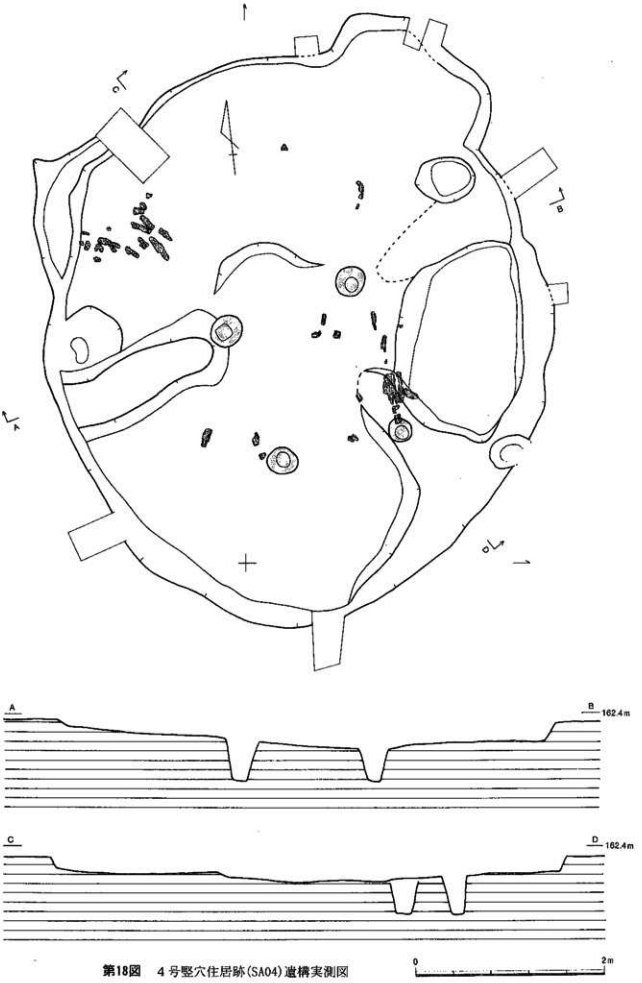


第17図　3号竪穴住居跡(SA03)内出土遺物実測図－2

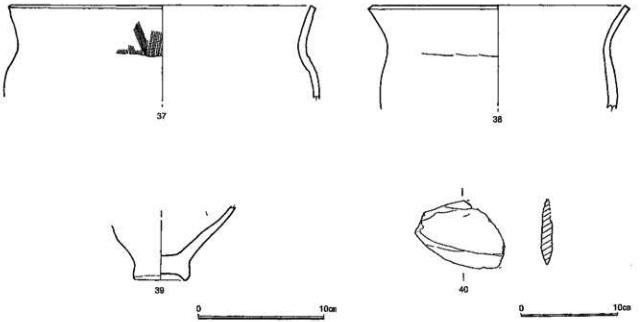
4号竪穴住居跡（ＳＡ04）　E-9区出土。長軸6.2m短軸5.6mの楕円形プランで、突出壁を3ヶ所4本柱の主柱穴を確認した。主柱穴はプランに対し南側にずれたかたちで位置する。南西側柱穴内から柱と思われる炭化した材(^{14}C測定)が出土している。東及び西側に各々方形と円形の土坑をともなう。埋土は第3層黒褐色土（基本土層よりやや暗い）に御池ボラが少量含まれ下部ほどその量が増える。37・38は甕で前者は口縁部カキアゲが明瞭で、後者はカキアゲが雑で不明瞭である。口唇はフラットである。39は小型の甕と思われる。40は頁岩製の石包丁である。

1号土坑（ＳＣ01）　E-9区ＳＡ04の北側第3層にて、甕形土器が南に口縁を向け横転した状態で出土した。土坑は検出面で径0.4m円形で深さ0.36m を測る。埋土は第3層黒褐色土に細粒の御池ボラを含んでいる。甕（41）はあげ底状底部から緩やかに立上がり頸部がやや締まり外反気味に口縁が延びる。口唇はフラットで、胴部最大径と口径がほぼ等しく23.5～23.9cm底径6.4～6.6cm器高28.8～29.2cmである。頸部にはカキアゲの痕跡がかすかに残る。口縁内面は横方向のハケメ外面は縦方向にハケメのちナデている。胎土に砂粒を多量に含み、同上半にはススの付着がみられる。

包含層内出土遺物　55は鉢と思われ胴部下で折れ底部は小さい平底ないし脚台付か、復元口径23.4cmを測る。56は小型鉢で中実脚台様の底部から立上がり口縁部でやや内に折れる。復元口径23.4cm底径5.5～5.9cm器高11.6～12cm、55・56とも胎土に砂粒を含むが焼成良好で堅緻である。57は壷の肩部で3条の貼付け突帯部分である。58は複合口縁壷の口縁部片で屈曲部はやや垂れ下がる。59は壷の肩部で屈曲部下に縦方向にハケメを施す。焼成良好で堅緻。60は壷の胴部で胴部最大径より上部に1条の刻目突帯を巡らす。61・62は重弧文長頸壷で、61は頸部に7条の浅い沈線を巡らせ、肩部に9本単位弧を描く。器壁は厚く焼成良好で堅緻、鈍い灰褐色を呈する。62はやや大型で頸部から肩部に沈線を巡らせ、上半の沈線間には右下がりの斜線を雑に2段に描き、下部には上向きと下向きの重弧を交互に配置する。全体に文様はラフで沈



第18図　4号竪穴住居跡(SA04)遺構実測図



第19図　4号竪穴住居跡(SA04)内出土遺物実測図

掲載遺物観察表

（　）反転復元

挿図番号	出土区（遺構名）	種別	器種	法量 口径	法量 底径	法量 器高	特徴
1	G-9	縄文土器	深鉢	(30.2)	—	—	外－ミガキ　金雲母etcの鉱物を含　色調-5YR3/4緋赤褐色 内－ナデ
2	H-9	縄文土器	深鉢	—	—	—	外－ミガキ　金雲母etcの鉱物を含　色調-5YR3/4緋赤褐色 内－ナデ
3	G-8	弥生土器	甕	(31.0)	—	—	外－縦方向ハケメ　焼成良好　色調-7.5YR5/4純い褐色 内－ナデのち斜め工具ミガキ
4	C-8 (ST01)	弥生土器	甕	—	—	—	外－口縁横ナデ　胴部斜め方向ハケメ　砂粒含　焼成良好　スス付着　色調-10YR7/4　純い黄褐色 内－口縁横方向ハケメ　胴部斜め方向ハケメ色調-10YR5/3　純い黄褐色
5	C-7 (ST01)	弥生土器	壺	—	—	—	外－ナデ　砂粒含　焼成良好　色調-7.5YR5/6橙色 内－ナデ
6	B-8 (ST01)	弥生土器	甕	—	—	—	外－ナデ　砂粒含　焼成良好　色調-7.5YR5/6橙色 内－ナデ
7	C-8 (ST01)	弥生土器	器台	—	—	—	外－ミガキ　横位3次脚の上下に6～7本の沼状　色調-7．5YR7/4純い橙色 内－ナデ
8	E-7 C-8 (ST01)	弥生土器	壺	—	—	—	外－ナデ　鉱物砂粒含　部分的にススが付着　色調-7.5YR7/4純い橙色 内－頸部にしぼり痕　色調-7.5YR4/1褐灰色
9	B-8 (ST01)	弥生土器	鉢	(14.0)	—	—	外－ナデ　砂粒含　色調-7.5YR5/4純い橙色 内－ナデ
10	C-9 D-9 C-8 (ST01)	弥生土器	甕	—	8.0	—	外－ナデ　焼成良好　色調-7.5YR4/6褐色 内－ナデ
11	C-8 (ST01)	弥生土器	壺	8.0	—	—	外－風化　砂粒含　色調-10YR5/4純い黄褐色 内－風化
12	C-8 (ST01)	弥生土器	壺	—	—	—	外－縦方向雑なハケメ　砂粒含　色調-10YR5/4純い黄橙色 内－ナデ　色調-10YR5/2灰黄褐色

線は浅い。胴部の屈曲はあまく長胴化する。63は長頸壺と思われる。器壁は薄く胎土に砂粒を含み脆弱である。64～66は高坏で65と66は同一個体ではないかと思料する。64は大型の坏部で口縁部は屈折しやや外反する。脚部（66）は脚部へ向って末広がり４ヶ所に円形の透かしをもつ。67～70は手捏ね土器である。76はホルンフェルス製の打製石斧である。

③中近世以降

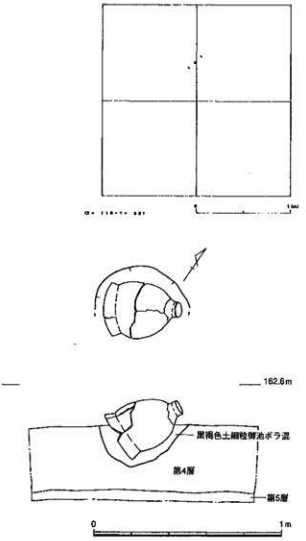
畝状遺構　D･E･F-8･9区で縞状（互層状）に堆積した白ボラと第３層黒褐色土を検出した。白ボラ部分が畝間黒褐色部分が畝山で、畝間畝山とも幅約0.3m畝の長さ５～６mほどである。

土坑　B･C-5･6区で出土。不定形で検出面よりの深度は浅く、埋土は第３層黒褐色土である。

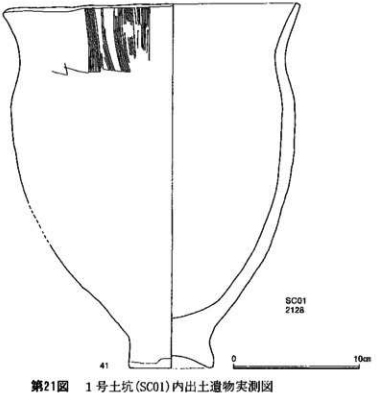
特殊土坑　B-9区、東西方向が長軸の楕円形プランで検出面2.1×1.6m、下面0.6×0.4m深さ1.3mを測る。埋土は黒褐色土で下部ほど御池ボラが多くなる。出土遺物がないため時期は不明である。

溝状遺構　都合６条の溝状遺構を確認した。近代の所産と思われる。1号溝は北よりB-6区で出現し、C-6，D-7区と略南北方向に直線的に走行しD-7区南側で東西方向に折れる。その後の走行不明。溝幅（検出面）で0.5m前後溝底0.3m深さ0.4～0.5mを測る。埋土は淡灰黒色土で下部はやや暗めである。２号溝・３号溝はF･G-５区で略南北方向に走行、埋土は灰黒色土で３号溝は２号溝に切られている。２号溝はF-５区で軽石等による廃棄的な集中箇所がみられた。４号溝はC-4･5区を東西方向に走行。埋土は灰黒色土溝幅0.6m底幅0.3m深さ0.3mである。５号溝B･C-5区で南北方向に走行、埋土は灰黒色土で溝幅0.9m底幅0.3～0.4m 深さ0.5～0.6mである。3号溝に続く可能性がある。６号溝G-6区で南北方向に走行。現代まで使用された溝である。７号溝F-７区調査区東壁からＬ字状に北へ折れ延び、２号溝と重複する。２号溝が新しい。溝幅0.9m底幅0.3m深さ0.4mである。

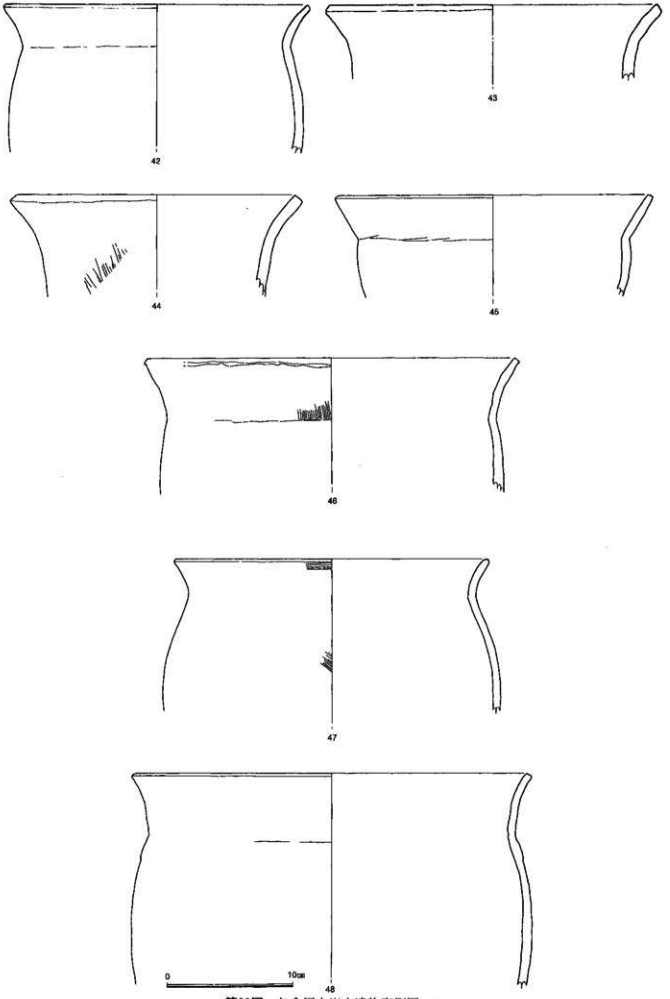
ピット　東側調査区域C・D・E・F・G-３・４区



第20図　１号土坑(SC01)遺構実測図



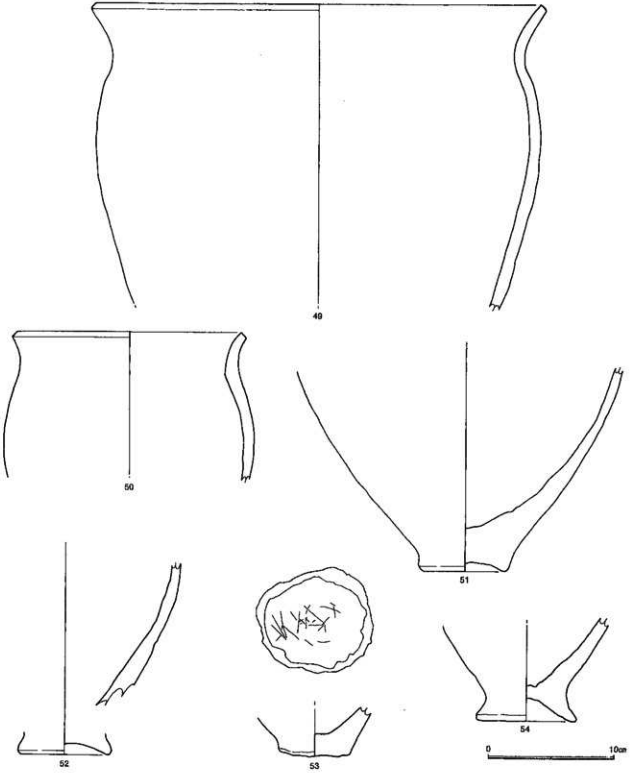
第21図　１号土坑(SC01)内出土遺物実測図



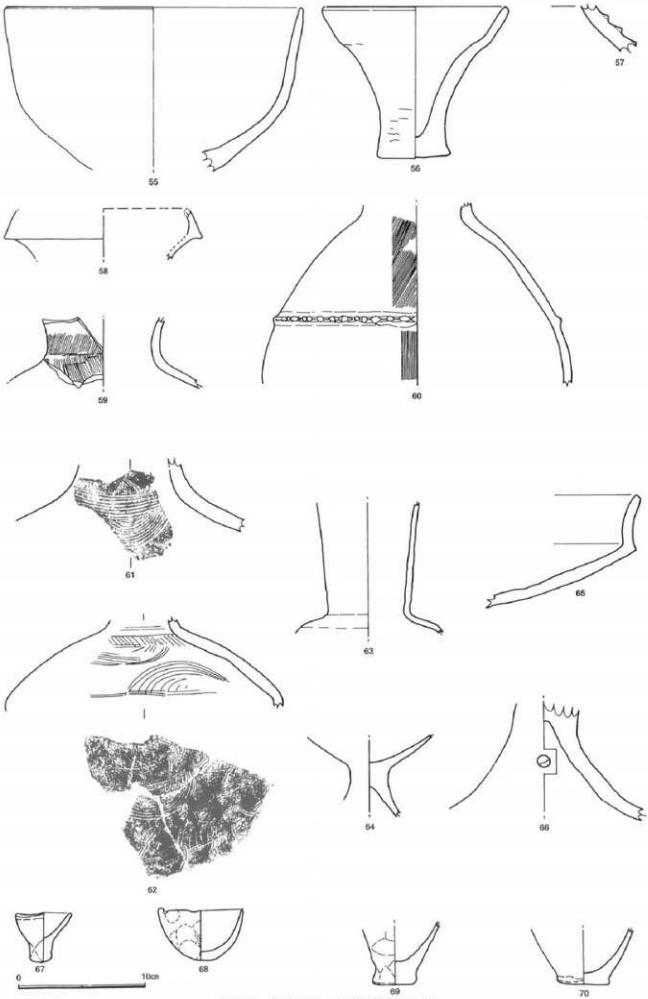
第22図　包含層内出土遺物実測図－1

で出土。埋土は第３層と第１層に分けられるが、ピットは並ばず建物の規模を確認するには至らなかった。87はF-4区ピット内出土である。

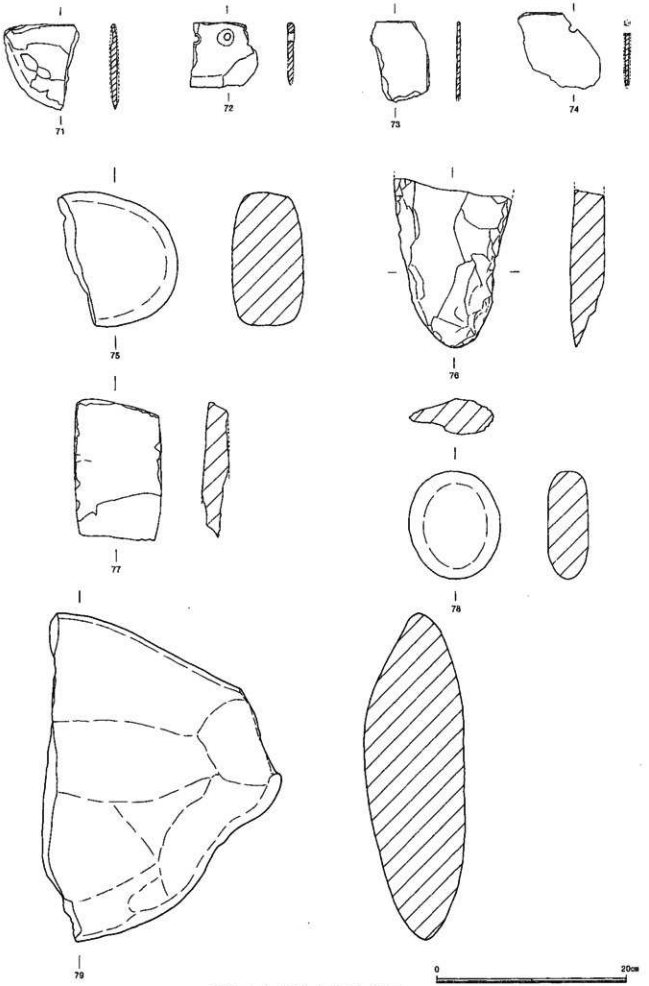
包含層内出土遺物　掲載したい遺物は溝状遺構やピット及び表層から出土したもので、潮っても18世紀以降のもので溝状遺構や近代の建物（ピット）に伴うものであろう。



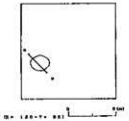
第23図　包含層内出土遺物実測図－２

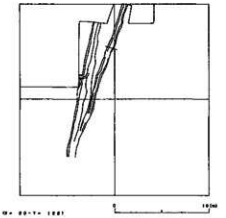


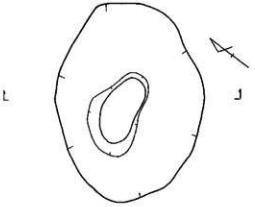
第24図　包含層内出土遺物実測図－3

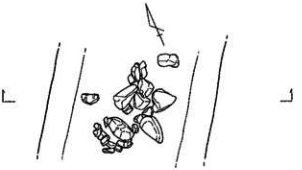


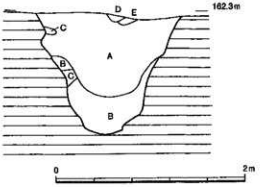
第25図　包含層内出土遺物実測図－4





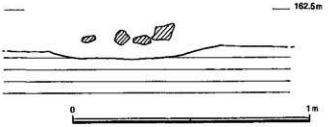




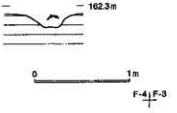


第26図　特殊土坑実測図

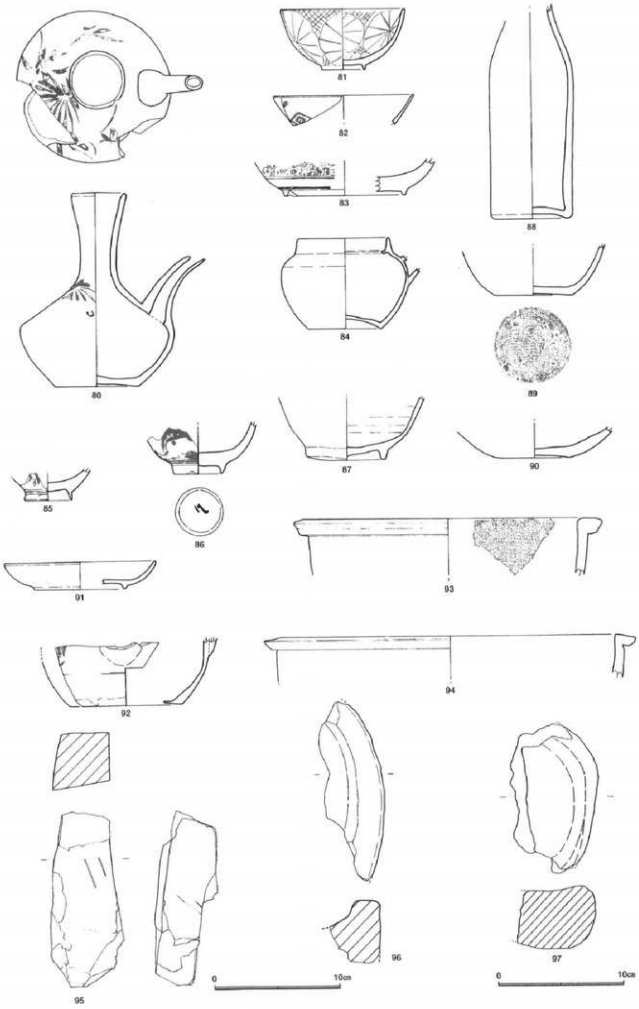
A 黒褐色土御池ボラを少量含む B 黒褐色土細粒及び粗めの御池ボラを含む C 細粒御池ボラに黒褐色土を含む D 明黒褐色土に粘土を含む E 濁乳白色粘土



第27図　溝状遺構内出土遺物実測図



第28図　ピット内出土遺物実測図



第29図　近世以降遺物実測図

掲載遺物観察表

( ) 反転復元

挿図番号	出土区(遺構名)	種別	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	特徴
13	C-7 (SA01)	弥生土器	壺	(22.6)	-	-	外-横ナデ 砂粒含 スス付着 焼成良好 色調-10YR7/3純ハ黄橙色 内-ナデ
14	C-6 (SA01)	弥生土器	壺	--	--	-	外-口縁ヨコナデのちナデ 砂粒含 色調-10YR6/3純ハ黄橙色 内-ナデ
15	C-7 (SA01)	弥生土器	壺	--	--	-	外-口縁ヨコナデのちナデ スス付着 色調-10YR4/2灰黄褐色 内-ナデ
16	D-7 (SA01)	弥生土器	壺	-	8.6	-	外-ナデ 砂粒含 色調-10YR6/3純ハ黄橙色 内-ナデ
17	C-7 (SA01)	土師	ミニチュア	4.7	-	-	外-ナデ 砂粒含 色調-7.5YR7/2明褐灰色 内-ナデ
18	C-7 (SA01)	弥生土器	壺	-	6.8	-	外-風化 色調-2.5YR7/3浅ハ黄色 内-風化
20	E-7 (SA02)	弥生土器	壺	(31.4)	-	-	外-口縁ルルを巻びた鋭ありカキアゲ 口唇フラット スス付着 砂粒含 色調-10YR7/4純ハ黄橙色 内-口縁ナデ 頸上部部分的に横方向のハケメ
21	E-7 (SA02)	弥生土器	壺	-	-	-	外-カキアゲ疑写 風化が著しい 砂粒含 色調-10YR6/4浅ハ黄橙色 内-風化
22	E-7 (SA02)	弥生土器	壺	-	-	-	外-口縁ヨコナデ頸の段有 ナデ 砂粒含 色調-7.5YR7/4純ハ橙色 内-口縁ナデ
23	E-7 (SA02)	弥生土器	壺	(19.0)	-	-	外-口縁ヨコナデのちナデ 砂粒含 スス付着 色調-7.5YR7/4純ハ橙色 内-ハケメのちナデ
24	E-7 (SA02)	弥生土器	壺	--	--	-	外-頸部下縦方向ハケメ 胴下部スス付着 砂粒含 器壁薄い 色調-7.5YR7/4純ハ橙色 内-ナデ 色調-7.5YR5/1褐灰色
25	E-7 (SA02)	弥生土器	鉢	(17.6)	-	-	外-下部ヨコナデ 底縁有り 6mm以下の砂粒含 色調-10YR7/3純ハ黄橙色 内-ナデ
26	E-7 (SA02)	弥生土器	高	(24.3)	ｸﾞﾗ15.9	11.5	外-ナデ 2mm以下の砂粒含 全端内外スス付着 色調-7.5YR7/3純ハ橙色 内-ナデ
28	E-6 (SA03)	弥生土器	壺	26.5 ~29.5	(9.0)	31.2 ~23.1	外-口縁端ナデ 胴上部工具ナデ スス付着 色調-7.5YR7/4純ハ橙色 内-口縁端ナデ
29	E-6 (SA03)	弥生土器	壺	24.3	-	-	外-口縁端ナデ 胴部縦方向ハケメ スス付着 色調-7.5YR7/4純ハ橙色 内-口縁端方向ハケメ 頸端ナデ
30	E-7 (SA02)	弥生土器	壺	15.8	-	-	外-口縁端ナデ 胴部ナデ 胴下部縦方向ハケメのちナデ 色調-10YR6/4浅ハ黄橙色 内-口縁端ナデ 胴部ナデ
31	E-6 (SA05)	弥生土器	壺	-	6.0	-	外-胴部例に三本ヘラメ 底部に1mm前後の竹管状の刺突 焼成良好 色調-10yr8/3浅黄橙 内-ナデ 色調-10YR6/1黒灰
32	E-7 (SA03)	弥生土器	鉢	12.2 ~ ?	11.9 ~11.4	14.7 ~14.2	外-ナデ 砂粒含 器壁や や薄く焼成 色調-2.5YR6/8橙 内-ナデ
33	E-7 (SA03)	弥生土器	鉢形土器	(6.0)	-	-	外-ミガキ 口縁ナデ 口唇フラット スス付着 焼成良好で堅緻 色調-2.5YR5/2灰黄 内-ナデ
34	E-6 (SA03)	弥生土器	赤彩壺	-	(5.0)	-	外-ミガキ 焼成良好で堅緻 転彩(赤雲母etc)色 色調-10YR6/6明黄褐 内-ナデ 色調-7.5YR4/1黒褐
37	F-9 (SA04)	弥生土器	壺	(23.8)	-	-	外-口縁ヨコナデ 砂粒含 スス付着 色調-10YR6/4純ハ黄橙色 内-縦方向ハケメ
38	E-9 (SA04)	弥生土器	壺	(20.0)	-	-	外-口縁ヨコナデ 砂粒含 スス付着 色調-10YR6/4純ハ黄橙色 内-ナデ
39	E-9 (SA04)	弥生土器	壺	-	4.2	-	外-ナデ 底部あげ底 砂粒含 色調-7.5YR7/4純ハ橙色 内-ナデ
41	E-10 SC01	弥生土器	壺	23.5 ~23.9	6.4 ~ 8.6	28.8 ~29.2	外-口縁ヨコナデ 胴部ナデ 底部あげ底 砂粒含 スス付着 色調-10YR6/6明黄褐色 内-口縁端方向ハケのちナデ 胴部ナデ
42	F-7	弥生土器	壺	(24.0)	-	-	外-口縁端ナデ 胴部ナデ 砂粒含 焼成良好堅緻 色調-7.5YR6/3純ハ褐色 内-口縁端ナデ
43	D-10	弥生土器	壺	(26.0)	-	-	外-口縁端ナデ 砂粒含 スス付着 色調-7.5YR6/4純ハ橙色 内-ナデ
44	E-9 D-9	弥生土器	壺	--	-	-	外-口縁部ナデ 胴部ハケメのちナデ 口唇フラット 砂粒含 10YR7/3純ハ黄橙色 内-ハケメのちナデ
45	E-6	弥生土器	壺	(24.6)	--	-	外-口縁ヨコナデ 口唇フラット 砂粒含 器壁 色調-7.5YR6/3純ハ褐色 内-ナデ
46	E-10	弥生土器	壺	(20.4)	-	-	外-口縁ヨコナデ 胴部ナデ 口唇フラット スス付着 砂粒含 色調-7.5YR6/3明褐色 内-ハケメのちナデ
47	E-9	弥生土器	壺	(25.2)	-	-	外-横方向ハケメのちナデ 砂粒含 色調-7.5YR5/4純ハ褐色 内-ナデ
48	E-8	弥生土器	壺	(31.0)	-	-	外-口縁ヨコナデ底 砂粒含 胴部AA付着 色調-10YR7/4純ハ黄橙色 内-ナデ
49	D-8 E-8 F-8	弥生土器	壺	(35.0)	-	-	外-口縁端ナデ胴部ナデ 砂粒含 口縁部分的に AA付着 色調-7.5YR6/3純ハ褐色 内-ナデ 色調-5YR3/1黒褐色
50	D-9 F-7	弥生土器	壺	(17.6)	--	-	外-口縁カキアゲ層の段状痕有 スス付着 砂粒含 色調-10YR7/4純ハ黄橙色 内-口縁端ナデ
51	E-10	弥生土器	壺	-	8.6	-	外-胴部部分的に縦方向ハケメ底部あげ底 砂粒含 AA付着 色調-10YR7/4純ハ黄橙色 内-胴上部ハケメのちナデ

掲載遺物観察表

( ) 反転復元

掲載番号	出土区（遺構名）	種別	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	特徴
52	S トレンチ	弥生土器	壺	—	7.0	—	外-鬼ハケナデ 底部あげ底 砂粒含 AA付着 色調-10YR7/4鈍い黄橙色 内-工具ナデ
53	H-9	弥生土器	壺	—	—	—	外-AA付着 5YR4.0/1 褐灰色 内-底工具ボとお形痕
54	D-10	弥生土器	壺	—	8.0	—	外-ナデ 底部あげ底 砂粒含 スス付着 色調-10YR7/3鈍い黄橙色 内-ナデ
55	E-8	弥生土器	鉢	(23.4)	—	—	外-ナデ スス付着 5mm前後の砂粒を基ちに含む 色調-10YR7/3鈍い黄橙色 内-横ナデ
56	H-8,9	弥生土器	壺	14.5	5.5 ～5.9	11.6 ～12	外-ナデ 底部平底（中実高台状） 砂粒含 色調-10YR6/4鈍い黄橙色 内-ナデ
57	H-7	弥生土器	壺	—	—	—	外-筒状原料3条貼付け突帯 1mm前後の砂粒含 AA付着 色調-7.5YR7/4鈍い黄橙色 内-ナデ 色調-7.5YR7/1明褐灰色
58	B-6	弥生土器	壺	—	—	—	粗色の胎土 砂粒多含色 色調-7.5YR7/6橙色
59	G-9	弥生土器	壺	—	—	—	外-胴部カキアゲ下端縦方向ハケメ 結砂含 褐褐 色調-10YR6/4鈍い黄橙色 内-ナデ
60	D-9,10	弥生土器	壺	—	—	—	外-胴上部に刻目突帯 縦方向ハケメ 結砂含 色調-10R4/4赤橙色 内-ナデ
61	D-9	弥生土器	赤彩壺	—	—	—	外-頸部赤彩底部下部に9本単位の重弧 焼成良好堅緻 色調-7.5YR6/2灰褐色 内-ナデ 色調-7. 5yr3/1黒褐色
62	E-7 F-7	弥生土器	赤彩壺	—	—	—	外-鬼筋Xetcの沈線（顕著）は浅く施 色調-10YR6/4鈍い黄橙色 内-色調-10YR4/1褐灰色
63	E-9	弥生土器	赤彩壺	—	—	—	外-ナデ 砂粒含 部部薄い 色調-2. 5YR6/8橙色 内-ナデ 色調-10Yr5/1暗灰色
64	H-8	弥生土器	高杯	—	—	—	一部ハケメのちナデ 砂粒含 色調-7. 5YR7/4鈍い橙色
65	E-9	弥生土器	高杯	—	—	—	65と同一個体の可能性大 表面風化著 杯部立上がり内面ミガキ 色調-2. 5YR6/6橙色
66	F-9	弥生土器	高杯	—	—	—	風化著しい 脚部透穴4ヶ所
67	D-8	土師	ﾐﾆｱｰﾁｭｱ	4.6	1.4 ～1.8	4.0	平底ね
68	E-9	土師	ﾐﾆｱｰﾁｭｱ	6.8	—	4.6 ～4.2	平底ね
69	D-8	土師	ﾐﾆｱｰﾁｭｱ	—	3.4 ～3.8	—	平底ね
70	D-9	土師	ﾐﾆｱｰﾁｭｱ	—	6.0	—	平底ね
80	D-7 (S001)	縄文	甕	4.2	6.5	15.4	平底底？
81	D-7 (S001)	縄文	鉢	(10.0)	(3.4)	4.8	肥厚 1.6c後半～19c前半
82	D-7 (S001)	縄文	鉢	(11.2)	—	—	型紙刷り
83	D-7 (S001)	縄文	皿	—	(9.6)	—	型紙刷り
84	D-6 (S001)	陶器	土瓶	7.3	5.8 ～5.9	7.2	
85	(S006)	縄文	鉢	—	3.6	—	
86	(S004)	縄文	鉢	—	3.8	—	表皮見 18c代 雪舟禅師筆 高台内大明年製のくずれ
87	F-4 p i t 02	縄文	瓶	—	6.5 ～8.7	—	肥前系 18c後半～19c前半
88	D-7 (S001)	ガラス	瓶	—	5.9	—	ﾌﾞﾄﾞｳ
89	G-6 (S002)	縄文	鉢	—	6.2	—	型紙刷り 明治～大正
90	G-6 (S002)	南部	土瓶	—	6.8	—	鐵釉
91	C-6 (S005)	縄文	皿	(11.8)	(7.3)	2.2	瀬戸系 銅版刷り 大正～昭和
92	B-6 (S005)	縄文	土瓶	—	(9.0)	—	平底底？
93	D-7 (S001)	陶器	ﾐﾆｱｰﾁｭｱ	外-24.8 内-20.6	—	—	鐵釉
94	B-6 (S005)	陶器	壺	外-22.6 内-24.4	—	—	鐵釉

3．大久保第２遺跡の自然科学分析

株式会社 古環境研究所

Ⅰ．大久保第２遺跡の土層とテフラ

1．はじめに

宮崎県中南部の火山灰土中には、霧島火山や桜島火山などから噴出したテフラが認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡において求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。そこで、年代の不明な土層が認められた大久保第２遺跡においても、地質調査を行って土層の記載を行うとともに、屈折率測定を行って示標テフラとの同定を行い、土層の年代に関する資料を収集することになった。調査の対象となった地点は基本土層断面である。

2．基本土層断面の土層層序

基本土層断面では、下位より黒灰褐色土（層厚27cm）、黄色軽石層（層厚４cm，軽石の最大径８mm，石質岩片の最大径２mm）、下位の黄色軽石層に由来する軽石を含み若干色調の暗い灰色土（層厚17cm，軽石の最大径７mm）、白色細粒火山灰層（層厚２cm）、砂混じりで若干色調の暗い灰色土（層厚16cm）、黄色粗粒火山灰層（層厚５cm）、砂混じりで若干色調の暗い灰色土（層厚33cm）、砂混じり暗灰色土（層厚56cm）が認められた（図１）。

3．テフラ検出分析

（１）分析試料と分析方法

土層観察の際に肉眼観察により検出できないテフラの有無を確かめるために、テフラ検出分析を行った。分析の対象となった試料は、基本的に５cmおきに採取された試料のうち、５cmおきの３点である。分析の手順は次の通りである。

1）試料10gを秤量。

2）超音波洗浄装置により泥分を除去。

3）80°Cで恒温乾燥。

4）実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

（2）分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。試料番号11には、あまり発泡のよくない灰色軽石（最大径1.6mm）のほかに、暗褐色や黒褐色のスコリア（最大径1.1mm）が比較的多く含まれている。とくにスコリアについては、その岩相から10～13世紀に霧島火山から噴出した霧島高原スコリア（Kr-ThS，井ノ上，1988，早田，1997）に由来すると考えられる。

試料番号7には、比較的よく発泡した灰色軽石（最大径2.4mm）が比較的多く含まれている。軽石の斑晶には斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その岩相から、1471（文明3）年に桜島火山から噴出したと考えられている桜島3テフラ（Sz-3，小林，1986，町田・新井，1992，後述）に同定される可能性が大きい。

試料番号3には、比較的よく発泡した灰色軽石（最大径2.9mm）のほかに、よく発泡した白色軽石（最大径1.2mm）が比較的多く含まれている。軽石の斑晶には、いずれも斜方輝石や単斜輝石が認められる。前者は、その岩相からSz-3に由来すると考えられる。一方、後者については、1914（大正）に桜島火山から噴出した桜島1テフラ（Sz-1，小林，1986，町田・新井，1992，後述）に由来すると考えられる。

4．屈折率測定

（1）測定試料と測定方法

テフラ層の可能性が非常に高い試料番号9、5、1の3層について、屈折率測定を行って示標テフラとの同定を試みた。測定は、温度--定型位相差法（新井，1972）による。

（2）測定結果

屈折率の測定結果を表1に示す。試料番号9には、比較的よく発泡した灰色軽石（最大径5mm）が多く含まれている。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。火山ガラス（n）と斜方輝石（γ）の屈折率は、各々1.510-1.516と1.710-1.714である。このテフラ層は、軽石の特徴や火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率から、Sz-3に同定される。

試料番号5には、比較的よく発泡した灰色軽石（最大径2.4mm）が比較的多く含まれている。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。火山ガラス（n）と斜方輝石（γ）の屈折率は、各々1.511-1.516と1.705-1.713である。このテフラ層は、軽石の特徴や火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率から、Sz-1に同定される。

また、試料番号1にも、比較的よく発泡した灰色軽石（最大径2.1mm）が比較的多く含まれている。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。火山ガラス（n）と斜方輝石（γ）の屈折率は、各々1.511-1.516および1.710-1.733である。このテフラ層に含まれる軽石や斜方輝石の多くは、桜島火山起源のテ

フラに由来していると考えられるものの、斜方輝石の一部には、約2.4～2.5万年前に姶良カルデラから噴出した姶良入戸火砕流堆積物（A-Ito，荒牧，1969，町田・新井，1992）や姶良Tn火山灰（AT，町田・新井，1976，松本ほか，1987，池田ほか，1995）に由来すると考えられる屈折率の高いものも含まれている。さらに火山ガラスとして、約6,300年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界カカホヤ火山灰（K-Ah，町田・新井，1978）に由来する淡褐色バブル型ガラスも含まれている。これらのことから、試料番号1については、テフラの二次堆積層の可能性が考えられよう。

5．小結

大久保第2遺跡の基本土層断面について、地質調査と屈折率測定を行った。その結果、下位より桜島3テフラ（Sz-3，1471年）と桜島1テフラ（Sz-1，1914年）を認めることができた。

文献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石によるテフラの同定－テフロクロノロジーの　基礎的研究．第四紀研究，11，p.254-269.

池田晃子・奥野　充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫（1995）南九州，姶良カル　デラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による　１４C年代．第四紀研究，34，p.377-379.

井ノ上幸造（1988）霧島火山群高千穂複合火山の噴火活動史．岩鉱，83，p.26-41.

小林哲夫（1986）桜島火山の形成史と火砕流．文部省科研費自然災害特別研究　「火山噴火に伴う乾燥粉体流（火砕流等）の特質と災害」（研究代表者　荒牧　重雄），p.137-163.

町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその　意義．科学，46，p.339-347.

町田　洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカ　ホヤ火山灰．第四紀研究，17，p.143-163.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）姶良Tn火山灰（AT）の１４C年代．第四紀研究，26，p.79-83.

早田　勉（1997）火山灰と土壌の形成．宮崎県史通史編１，p.33-77.

表１　大久保第２遺跡のテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア		
		量	色調	最大径
基本土層断面	3	＋＋	灰＞白	2.9, 1.2
	7	＋＋	灰	2.4
	11	＋＋	灰＞暗褐，黒褐	1.6, 1.1, 1.1

＋＋＋＋：とくに多い，＋＋＋：多い，＋＋：中程度，＋：少ない，－：認められない．最大径の単位は，mm.

表２　大久保第２遺跡基本土層断面の屈折率測定結果

試料	重鉱物	火山ガラス（n）	斜方輝石（γ）
1	opx>cpx	1.511-1.516	1.710-1.733
5	opx>cpx	1.511-1.516	1.705-1.713
9	opx>cpx	1.510-1.516	1.710-1.714

opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石．屈折率の測定は温度一定型位相差法（新井，1972）による。

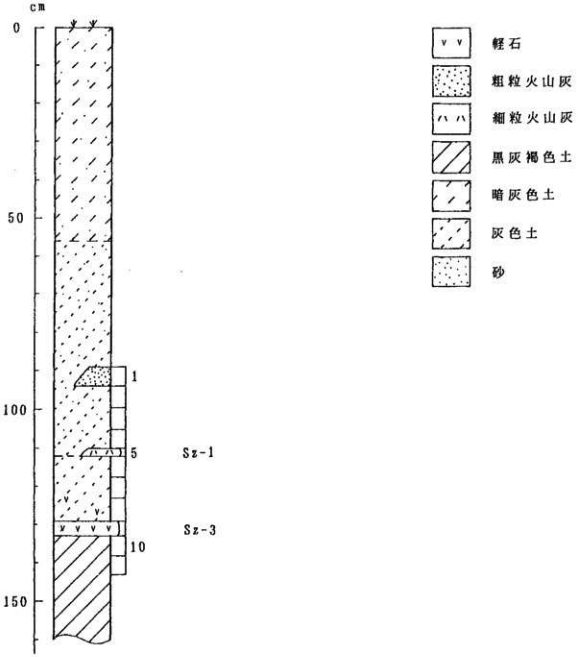


図1　大久保第2遺跡の基本土層柱状図（数字はテフラ分析の試料番号）

Ⅱ．大久保第２遺跡における放射性炭素年代測定

１．試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	SA01	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄 ベンゼン合成	β線法
No.2	SA02	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄 ベンゼン合成	β線法
No.3	SA03	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄 ベンゼン合成	β線法
No.4	SA04	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄 ベンゼン合成	β線法

２．測定結果

試料名	１４C年代 (年BP)	δ１３C ( )	補正１４C年代 (年BP)	暦年代 交点（1σ）	測定No. (Beta-)
No.1	1790±50	-25.4	1780±50	AD245 (AD220～340)	117684
No.2	1820±60	-24.8	1830±60	AD220 (AD120～250)	117685
No.3	1950±40	-25.5	1940±40	AD75 (AD45～110)	117686
No.4	1940±60	-26.3	1920±60	AD90 (AD45～145)	117687

1）１４Ｃ年代測定値

試料の１４Ｃ/１２Ｃ比から、単純に現在（1950年AD）から何年前（BP）かを計算した値。１４Ｃの半減期は5,568年を用いた。

2）δ１３Ｃ測定値

試料の測定１４Ｃ/１２Ｃ比を補正するための炭素安定同位体比（１３Ｃ/１２Ｃ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（　）で表す。

3）補正１４Ｃ年代値

δ１３Ｃ測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、１４Ｃ/１２Ｃの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}Ｃ濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には年代既知の樹木年輪の^{14}Ｃの詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。暦年代の交点とは、補正^{14}Ｃ年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σは補正^{14}Ｃ年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ値が表記される場合もある。

Ⅲ．大久保第２遺跡出土炭化材の樹種同定

１．試料

試料は、SA01～SA04から出土した５点の炭化材である。

２．方法

試料を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

３．結果

同定結果を表１に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

表１　大久保第２遺跡出土炭化材の樹種同定結果

試料		樹種（和名／学名）	
SA01	C	イヌガヤ	*Cephalotaxus harringtonia* K. Koch
SA02	1728	エゴノキ属	*Styrax*
SA02	1863	イヌガヤ	*Cephalotaxus harringtonia* K. Koch
SA03		イヌガヤ	*Cephalotaxus harringtonia* K. Koch
SA04	Pit１	イヌガヤ	*Cephalotaxus harringtonia* K. Koch

a.イヌガヤ　*Cephalotaxus harringtonia* K. Koch　イヌガヤ科　　図版１・２

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は漸進的で、晩材の幅は非常に狭い。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、トウヒ型で１分野に１～２個存在する。樹脂細胞が散在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、１～10細胞高ぐらいである。樹脂細胞が多く見られる。

以上の形質よりイヌガヤに同定される。イヌガヤは、岩手県以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の低木または小高木で、高さ10～15m、径20～30cmである。材はやや堅硬で、木理は緻密であるが、不整でしばしば波状を呈する。建築、器具、土木、ろくろ細工、薪炭などに用いられる。

b. エゴノキ属　*Styrax*　エゴノキ科　　図版３

横断面：年輪のはじめに、やや小型で丸い道管が、おもに２～４個放射方向に複合して散在し、晩材部ではごく小型で角張った道管が単独あるいは数個放射方向に複合して散在する半環孔材である。早材から晩材にかけて道管の径はゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は10本前後である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で１～３細胞幅である。

以上の形質よりエゴノキ属に同定される。エゴノキ属には、エゴノキ、ハクウンボクなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の小高木で、高さ10m、径30cmである。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

４．所見

SA01～SA04から出土した炭化材は、イヌガヤとエゴノキ属であった。イヌガヤはやや暖かい山地ないし平地の林内に生育し、エゴノキ属は谷沿いや河辺に生育する樹木である。

参考文献

佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p. 20-48.

佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p. 49-100.

大久保第２遺跡出土炭化材の顕微鏡写真

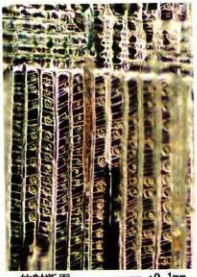
横断面 ―――― :0.4mm

放射断面 ―――― :0.1mm

接線断面 ―――― :0.2mm

1．SA01　C　イヌガヤ

横断面 ―――― :0.2mm



放射断面 ―――― :0.1mm

接線断面 ―――― :0.1mm

2．SA03　イヌガヤ

横断面 ―――― :0.4mm

放射断面 ―――― :0.2mm

接線断面 ―――― :0.2mm

3．SA02　1728　エゴノキ属

4．小結

今回の大久保第２遺跡発掘調査では、縄文時代後期末、弥生時代前・後期、中近世以降の遺構・遺物の出土をみた。縄文土器は三万田・御領系の精製深鉢形土器で南九州では中岳Ⅱ式土器と呼称され、中尾山・馬渡遺跡（市内蓑原町）、尾平野洞窟（同安久町）、大岩田・村ノ前遺跡（同大岩田町）、成山遺跡（豊満町）、加治屋遺跡２（南横市町）などでも出土している。弥生時代は前期の甕形土器が１点出土しているほかは後期の所産で周溝状遺構１基、竪穴住居跡４基が出土している。周溝状遺構（ＳＴ01）は一辺７mの方形プラン（一部隅丸）で、出土遺物は甕、壷、鉢形土器のほかに重弧文土器（器台？）が出土。１号竪穴住居跡（ＳＡ01）は南北5.2m、東西5.0mの円形プランで主柱穴は２本である。出土遺物は甕、壷、手捏土器等である。２号竪穴住居跡（ＳＡ02）は4.4×3.6mの主柱穴２本のＨ型の方形プランで、甕、壷、蓋等が出土している。３号竪穴住居跡（ＳＡ03）は推定径７m程の円形の花弁型で、甕、壷、鉢と長頸壷（？）と無頸壷（櫛描波状文）等が出土している。４号竪穴住居跡（ＳＡ04）は6.2×5.6mの（楕）円形プランで４本の主柱穴をもつ。出土遺物は甕と石庖丁である。

各々遺構内出土の甕形土器と壷形土器の特長を述べると、

ＳＴ01－＜甕形土器＞「く」の字口縁で屈曲部に段を有する。口縁部は短い。底部は中空脚台。＜壷形土器＞底部は平底。

ＳＡ01－＜甕形土器＞明瞭に「く」の字に折れるもの（口縁部が短い）と緩やかに外反するもの（段を残すもの・口縁部が長い）に分けられる。＜壷形土器＞底部は平底。

ＳＡ02－＜甕形土器＞緩やかに外反するが、屈曲部外面は「く」の字を意識し折れる。口縁部は長い。

ＳＡ03－＜甕形土器＞屈曲部はあまく外反する。口縁部は短い。＜壷形土器＞底部は平底。

ＳＡ04－＜甕形土器＞屈曲部はあまく外反する。口縁部は長い。底部はあげ底様。

以上甕形土器の口縁部が「く」の字口縁（短い口縁部）から緩やかに外反する（長い口縁部）と変化するならば、

ＳＴ01 ⟶ ＳＡ03 ⟶ ＳＡ01 ⟶ ＳＡ02 / ＳＡ04　という流れが追える。

また、竪穴住居内出土炭化材の^{14}Ｃ年代測定では、古い方がＳＡ03・ＳＡ04、新しい方がＳＡ01・ＳＡ02と絶対年代は別にして相対的には２グループに分けられる。周溝状遺構（ＳＴ01）はＳＡ01より古いため、存続期間はＳＡ03・ＳＡ04と共存すると考えられ、上述とは異なる結果となる。

ＳＴ01・ＳＡ03・ＳＡ04 ⟶ ＳＡ01・ＳＡ02

包含層内遺物をみると、高坏（65・66）は坏部が中ほどで折れ外反し、脚部は裾野へ外反しながら広がり円形の透かしをもつ。これは石川編年のＡⅣ（坏Ａ１・脚Ａ２）に分類され、弥生時代後期後半に比定される。また、松木薗式平行期の壷形土器、重弧文長頸壷なども出土している。重弧文長頸壷の胴部は間延びした膨らみをもつことからやや時代が下がると思われる。このほか、１号周溝状遺構（ＳＴ01）内より重弧文土器（器台？）が出土し、周溝状遺構の性格を示唆していると思われる。

最後に都城市内の弥生後期から古墳初頭の周溝状遺構または竪穴住居を出土した遺跡地名表を掲載した。

引用文献

石川悦雄　1990　「弥生時代後期後半から古墳時代の土器編年にむけて－予察１　高坏」『宮崎県総合博物館紀要』第15輯　宮崎県総合博物館

遺 跡 地 名 表（弥生後期～古墳初頭）

番号	遺跡名	所在地	遺構	内訳（m・本）													
				周溝状遺構	平面形態	内部の遺構	円形花弁型	突出壁数	主柱穴数	方形花弁型	突出壁数	主柱穴数	円形（突出壁なし）	主柱穴数	方形（突出壁なし）	主柱穴数
1	大久保第2	乙訓町	周溝状遺構1	7×7	方形	なし										
			竪穴住居4													
			SA01										5.2×5.0	2		
			SA02							4.4×3.6	2	2				
			SA03				7×7？	2+α	2+α							
			SA04				6.2×5.6	3	4							
2	加治屋第1	南城市	周溝状遺構1	1	不明											
			竪穴住居5													
			1							1	2					
			2												1/2	－
			3												1	
			4												1/2	－
			5												1/2	－
3	岩立	五十町	竪穴住居4													
4	柳川原	牛町	竪穴住居1							5×5？	2+α	2+α				
5	年見川	草水町	周溝状遺構1	4.8×3.6	方形	住居跡1,各2,ピット5										
			竪穴住居2													
			2号												4.3×4.3	－
			3号												7.3×5.3	2
6	向原第1	立野町	周溝状遺構8													
			竪穴住居4													
7	中川ノ上	草水町	周溝状遺構2													
			竪穴住居9													
8	赤ノ女(第1次)	草水町	周溝状遺構6													
			竪穴住居12													
9	祝吉第1	祝吉町	竪穴住居7													
			Y-1							1	3	7				
			Y-2				7.1×6.8	2	－							
			Y-3				1/4	3+α	－							
			Y-4												3.7×2.8	－
			Y-5												3.7×α	－
			Y-6												3.7×3.9	－
			Y-7				7.6×7.6	6	－							
	祝吉第2	祝吉町	竪穴住居13													
			Y-2							1	1	－				
			Y-3							1	?	－				
			Y-4							1	?	－				
			Y-5							1	3	－				
			Y-6							5×5	4+α	2+α				
			Y-7							8.25×8.1	3	4			1	1
			Y-8												1	－
			Y-9												4.3×3.25	1
			Y-10				6.0×5.1	2	4							
			Y-11							1	3	－				
			Y-12							1	1+α					
			Y-13							1	1	3				
10	中大五郎第1	九谷町	周溝状遺構3													
			SL1	1	不明											
			SL2	2.8×α	方形	ピット										
			SL3	3.3×3.0	円形	ピット										
			竪穴住居7													
			SA1							5.7×5.4					1	5
			SA2				1/2	4+α	4+α							
			SA3							5.77×5.15	2	3				
			SA4												6.9×5.53	4
			SA5												1	5
			SA6												4.7×3.3	2+α
			SA7							5.58×5.45	2	4				

番号	遺跡名	所在地	遺構	内			駅			(m・本)						
				周溝状遺構	平面形態	内部の遺構	円形花弁型	突出壁数	主柱穴数	方形花弁型	突出壁数	主柱穴数	円形(突出壁なし)	主柱穴数	方形(突出壁なし)	主柱穴数
	中大王原第2	丸谷町	周溝状遺構3													
			SL1	3.6×2.6	方形	ピット										
			SL2	3.8×3.7	方形	なし										
			SL3	2.8×2.8	方形	なし										
			竪穴住居6													
			SA1												6.8×4.5	2
			SA2												6.0×4.5	2
			SA3				9.3×9	9	5							
			SA4												4.25×3.87	2
			SA5							5.45×3.8	1+α	1+α				
			SA6												5.5×4	2
11	前畑	丸谷町	竪穴住居25													
			SA2												4.4×4.4	4
			SA4							8.2×7.2	8	4				
			SA5												6×6	2+α
			SA6												7×7	4
			SA7										6.6×6.6	4		
			SA8							7.8×6.4	3	2				
			SA9												7.4×7.4	4
			SA11							7.4×α	4+α	4				
			SA12							7.2×α	4+α	4				
			SA13												5.5×5.2	4
			SA14							7.4×6.8	5	2or4or6				
			SA15				7.6×7.0	2	5							
			SA16												4.4×3.8	4
			SA18												3.25×2.8	2
			SA19							8.2×8.2	7	4				
			SA20												3.8×3.5	—
			SA21												4.0×3.6	2
			SA22												4.8×4.8	2
			SA24												4.6×3.6	1+α
			SA25							1/2	6+α	5				
			SA26							5.6×5.9	2	4+α				
			SA27							6.0×6.0	4	4				
			SA28												?	
			SA29												3.7×3.1	?
			SA40							5.6×4.3	1	2				
12	丸谷第1	丸谷町	竪穴住居2													
			1号							7.05×7.05	3	4				
			2号							9.87×9.2	2	7				

表 の 見 方

分数表記 - 住居跡の発掘割合を表す

一 覧 表 出 典

『加治屋遺跡２』「都城市文化財調査報告書第35集」1996年

『年見川遺跡』「宮崎県史 資料編 考古１」

『祝吉遺跡』「都城市文化財調査報告書第１集」1981年

『祝吉遺跡』「都城市文化財調査報告書第２集」1982年

『丸谷地区遺跡郡』「都城市文化財調査報告書第34集」1996年

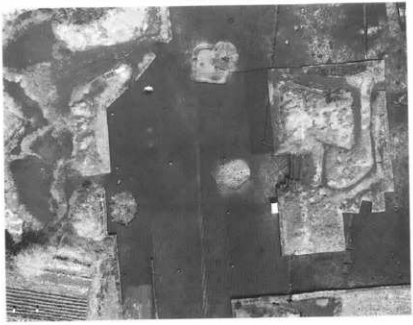
『丸谷第１遺跡』「九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書(3)」1979年

柳川原遺跡　横山哲英氏ご教示

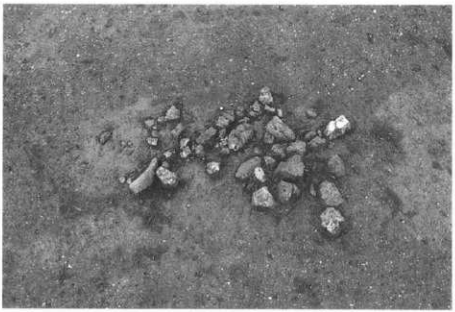
岩立遺跡・向原第１遺跡・牟田ノ上遺跡・池ノ友(第１次)遺跡　柴畑光博氏ご教示

発掘調査区域全景(南より)

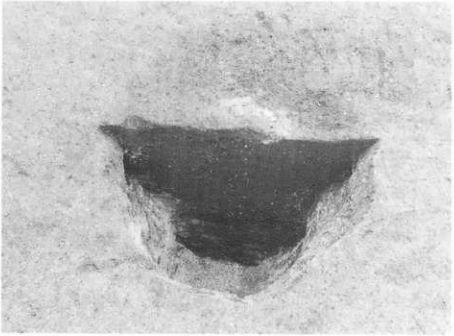
発掘調査区域全景(真上より)



ＳＴ01，ＳＡ01･02･03･04(真上より)



3号溝状遺構内遺物出土状況

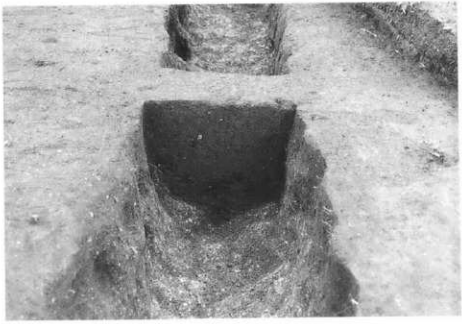


特殊土坑半サイ状況(南より)

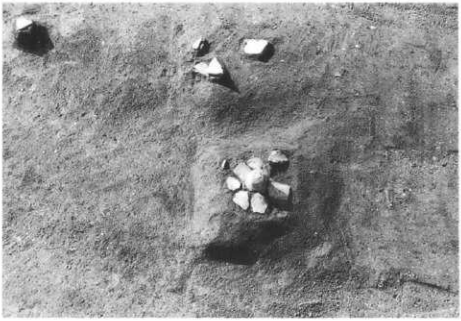
同完掘状況(南より)

畝状遺構検出状況(東より)

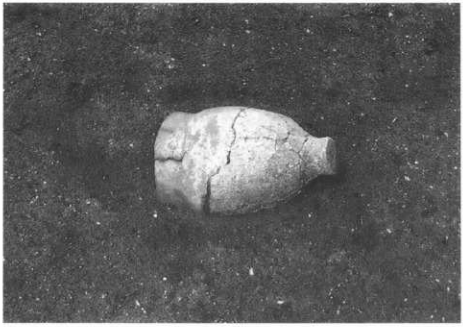
畝状遺構検出状況(南より)



1号溝状遺構土層断面(南より)

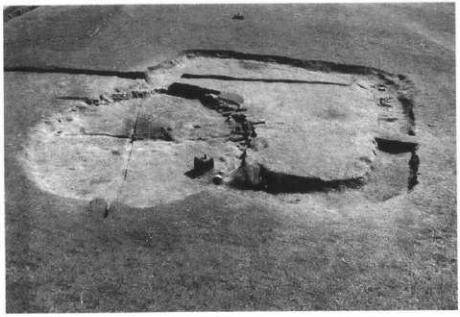


高坏脚部出土状況



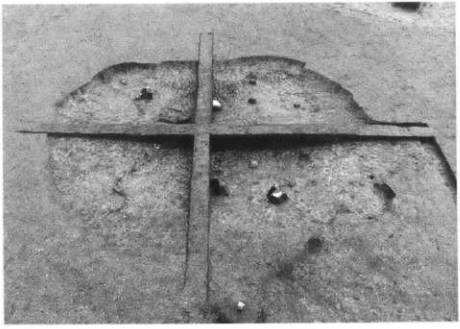
1号土坑検出状況(東より)

同タチワリ状況(東より)

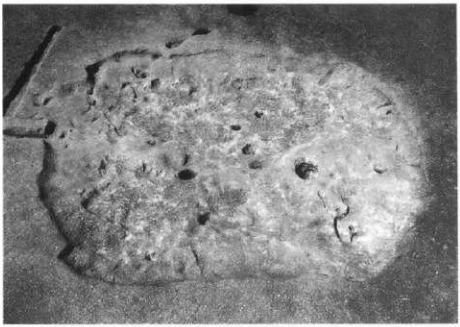


周溝状遺構及び
1号竪穴住居跡精査(北より)

同完掘状況(北より)

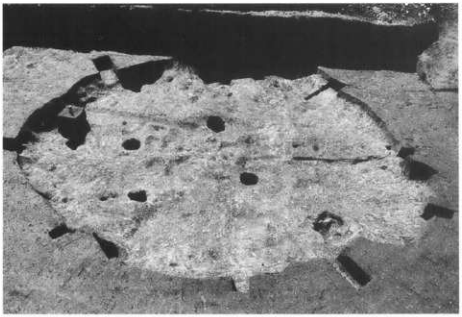


2号竪穴住居跡遺物出土(北より)



2号竪穴住居跡完掘状況(南より)

4号竪穴住居跡遺物出土状況
(東より)



4号竪穴住居跡完掘(東より)

3号竪穴住居跡遺物出土状況
(南より)

3号竪穴住居跡完掘状況(西より)

1

8

4

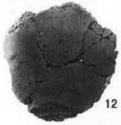
9

7

6

5

2


12

11

10

3

17

14

15

13

16

18

19

33

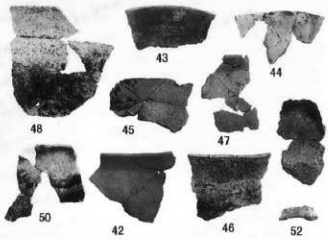
20

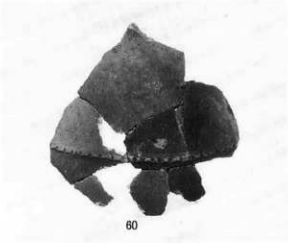
22

21

23

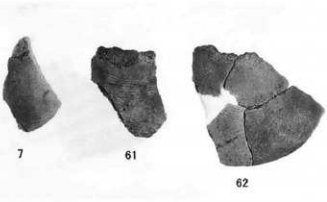
25

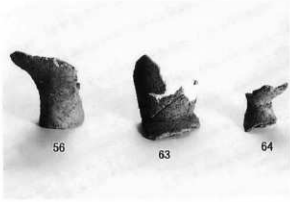

43
44
48
45
47
50
42
46
52


60

37
38
39

59


7
61
62


56
63
64

33
31

49

29

32

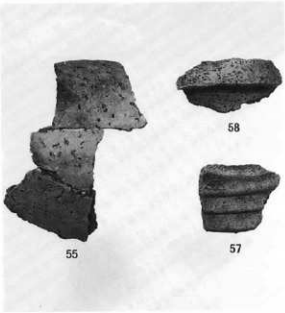
41

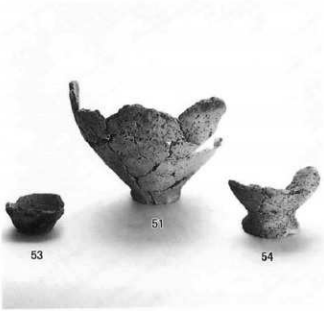
26

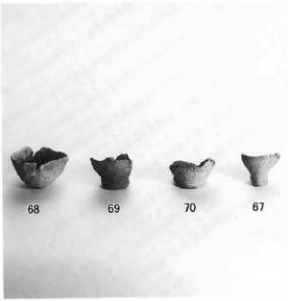
65

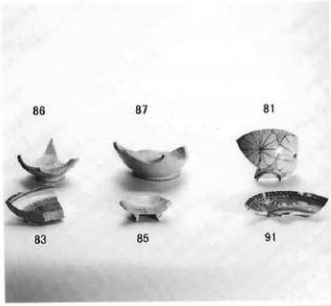
28

66

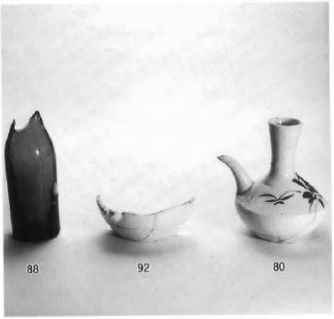

58
55
57

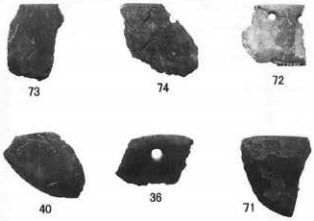

51
53
54


68
69
70
67


86
87
81
83
85
91

84
89
93
94
90


88
92
80


73
74
72
40
36
71

27

79

35

76

77

95

97

78

75

96

報　告　書　抄　録

フリガナ	オオクボダイ
書　　名	大久保第２遺跡
シリーズ名	都城市文化財調査報告書
ｼﾘｰｽﾞ番号	第４８集
編集者名	矢部喜多夫
発行機関	都城市教育委員会
所　在　地	都城市姫城町６街区21号
発行年月日	1999年３月31日

所収遺跡名	所　在　地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大久保第２遺跡	都城市乙房町字大久保	31° 45′ 45″ 付近	131° 03′ 05″ 付近	1997. 10. 14 ～1998. 3. 31	4，000㎡	民間開発

種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	
集落跡	縄文後期末 弥生前期 後期 中世 近世	周溝状遺構１ 竪穴住居　４ 土坑　　畝 柱穴 溝状遺構	縄文土器 弥生土器 近世陶磁器	

都城市文化財調査報告書第48集

大久保第2遺跡

1999年3月

編集　宮崎県都城市教育委員会
発行　〒885-8555 宮崎県都城市姫城町6街区21号
TEL(0986)23-9547 FAX(0986)24-1989

印刷　株式会社 みやこ印刷
〒885-0026 宮崎県都城市大王町51－22
TEL(0986)23-1682 FAX(0986)22-1682